
雪の上の約束

京(みやこ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の上の約束

【Zコード】

Z2696D

【作者名】

京
みやこ

【あらすじ】

高校一年生のリンは辛いことから逃げるように生きている。雪の上で言われた言葉だけが唯一の生きがいだったが、新しい場所で過ごすようになつてから人生が変わり始める。友情に支えられながらリンが成長していくお話。

プロローグ 赤

やつぱり神様なんていないんだ

残酷な赤色で染まつた手を見ながらいつも思つた。

赤いライトが周りを照らしサイレンの音がしばらく鳴つていたと思うけど、私には違う世界で起つていてことの様に思えた。

心配して声をかけて来る人も居た気がするけど、あまり覚えていない。

フィルターがかかつていて、ちゃんと田が見えていなかつた気がする。

耳を塞がれていたかのよひに、ちやんと音を拾えていなかつた気がする。

「気がする」とか曖昧な記憶だけど、でも、確実に起つたことなんだ。

ただ、それだけははつきつ覚えてつる。

それと雪の積もっていたとしても寒い日だったところでも

1・高須です。

キーンゴーンカーンゴーン・・・・・・・・

「起立、礼！」

「ありがとうございました」

田を開けるとともにおなじみの挨拶が部屋に響いた。と、言つてもあまり真面目ではないこの学校で「ありがとうございました」ってちやんと言うのは先生と、比較的優等生タイプの生徒数人だけだ。ま、私にいたつては起立することもなく終わったことなんだけど。

「タカスン、マジウケルし」

「さすがにパネエよ！」

パネエ＝半端ねえ

おなじみの挨拶が終わつた後、同じクラスの女の子が一人、笑いながら寄つてきた。一人とも今風の子、という感じで“ギャル”と言えばいいのかな。化粧はバツチリ、髪は茶髪で髪型も朝時間をかけてセットしてきている。スッピンでボサボサの髪で学校に登校していくぐらいうなら遅刻なんかおかまいなし、というタイプだ。多分この一人だけじゃなくて、この学校全体に言える事だろうけど。とりあえず私は今時の言葉とかよく分からぬから、真面目タイプではないといふことだけ言つておこう。

「・・・・・・うん？」

「まーだ起きてないな？」

「パネエ！」

起きたばかりの私はもともとあまり得意でないタイプの人達との会話にすぐに反応ができなかつた。一人はまだ「パネエ」としか発言してないし。

「席についてー！帰りのＨＲ始めるぞー！」

結局返事をしない内に担任の先生（推定四十五歳）が入ってきた。

「もう帰れるのか。。。」

「パネエー！」

ポツリとつぶやいた一言で、またお決まりの声が返ってきた。席に戻りながら反応するなんて、女の子は何でこんなにお喋り好きなんだろ、とかまだ眠っている頭でボンヤリと思つた。

こんな私も女の子としてはどうなんだろ？って思うけどね。

私、高須リン。十七歳の高校一年生。
たかす

つい一週間前にこの高校に転入してきた。

前の学校とは違う時間割の組み方にまだ慣れていないけど、とりあえず今日も無事に学校生活が終わって良かった。先生がいつもの口調で何か話しているけど、そんなことはお構いなしにさつさと帰る準備を始める。特に長引くような話もなく、帰りの挨拶が終わるとリンは自分の荷物を持って教室のドアへとさつさと向かう。

「ちょっとタカスン、待つて待つて！」

「今日帰り付き合つてよ。」

ドアへと真っ直ぐに向かつていたリンをさつきの一人が慌てて呼び止めてくる。リンはそんな二人に呼び止められて「何？」と口に出さず表情で反応した。

「タカスン本トに無口だよねー」

「マジパネエー！」

おおつと、まだ「パネエー」ワールドは続くみつだ。それにしてもこの一人、話す順番がいつも一緒に気がする。だから片方の子がいつも「パネエー」と言つているのだ。

「今日さ、どうしてもメンバーが足らねえんだよ。」

「お願い、タカスン用事ないなら私たちに付き合つて？」

一瞬で話の内容がわかり思つきり嫌な顔になる。授業の合間に合コンのメンバーが足りないと愚痴をこぼしていたからだ。でもその時はリンを誘わなかつた。どうせ首を縦に振るわけはないだろうと思つたからだろうが、それは正解だ。

「そんなに嫌な顔しないでよ。」

「変なメンバーじゃないからさー。」

と、言つても嫌なものは嫌だ。もともと大勢で集まつて騒ぐとかいうのが好きじゃない。相手が変だらうと変じゃなかうと、そんなのは関係なしにだ。

「タカスンいつもさつさと帰るしわあー。」

「親睦会もやらず終いだしさあー。」

いつも先に話す子がいつの間にか取り出した鏡で髪型をチェックしながら言つ。合コン前とあつて、休み時間より入念にチェックしている。

それにしても一人そろつて語尾を延ばさないで欲しい。何だかこつちのテンポがおかしくなつてくる。

「本とは引き立て役呼びたかっただけじわあ、」

「テンション下がるからやめてな、つて先に言われちやつてー。」

そうですか。じゃあ私も無理ですね。と言いたかったけど、結局この調子で話す一人にペースを奪われて気がついたら手を引かれて学校の門をくぐつていた。さつきまで教室に居たはずなのにいつの間にこんな場所まで誘導されていたんだろう。最近の若者は怖い怖い、とかやつぱり言葉には出さずにおばさんくわいことを心の中で思つた。

「じゃあ俺らの出会いに乾杯！！」

「イエーイ！」

最初からやたらと高いテンションで始まる挨拶とみんなの声とヒップ同士の奏でる音が店内に響いた。

「タカスンもー！」

「イエーイ！」

リンを連れてきた一人は完全に出遅れたリンのグラスにも自分たちのグラスをぶつけてきた。ただ頭数をそろえたかつただけで、店ではほとんど無視されるだろうとか思つていたので少し驚く。しかも絶対にみんなお酒を飲むとか思つていたのに、女の子は全員制服だからとジュースを注文していたのも驚きだ。さつき思つたように「最近の若者は・・・」と見た目だけで判断している人達と同じ考え方を持つてしまった自分を少し恥じた。

まあ後から昔お酒を注文したら断られたという話を聞いたりとか、男の人が注文したお酒をもらつたりしている様子を見て恥じる」とはなかつたかもしれないと思つたけどね。

合コンには私服の男の人五人と、同じ高校の女の子がリンを入れて五人揃つた。男の人は髪の毛が金髪だつたりピンクの人がいたりと、結構強烈な印象がある。女の子は同じ高校といつても連れてきた一人をのけた後の二人は始めて見た子だつた。違うクラスの子だから知らなくてもおかしくはなかつただろうけど、その子達は転入生と言うこともありリンのことを知つていた。

「じゃあまずは・・・自己紹介！」

「イエーイ！」

普通のことを言つてもなぜか盛り上がるこの場所はやっぱ自分に合わない、と乾杯から五分足らずでそう思つた。転入してきた時ですら自己紹介が嫌で嫌で仕方なかつたのに、こんな高いテンションの中で自己紹介なんかできるわけがない。もう帰りたい、と早々に、やっぱ口には出さずに心の中で思つた。

みんなは慣れているかのようにならスラスラと自分のことを紹介していく。最近はまつてることを面白おかしく紹介したり、ブレイク中の芸人のワンフレーズを引用したりして、ショッちゅう笑いがおこっている。その度にやっぱりというか「パネエ」という言葉もよく聞こえた。

そしてこの時初めてこの場所に連れてきた一人のフルネームを知つ

た。

いつも先に話す子が永井佳澄、「パネエ」を連発する子が中瀬彩女。最初に話しかけてきた時「私、佳澄。」「私は彩女。彩って呼んで。」という最初からお友達モード全開で苗字なんか聞いたことなかつた。知つたところで何か違う関係になるわけじやないけど、ノリの低いリンにあきもせず話しかけてくれる二人の名前くらいは覚えておかないと失礼かも、と思つた。

「じゃあ最後の自己紹介いつてみよーう！」

「イエーイ！」

相変わらず盛り上がつてゐる声にハツとすると、自己紹介の順番がいつの間にかリンまで回つてきたらしく、みんなの視線が自分に向いているのがわかつた。しかも最後だと言つてみんなの注目が高まつてゐるのがわかる。

困つた・・・。

思わず止まつてしまいその場の空氣が張り詰める。

「もしかして緊張しちゃつてる？」

乾杯の声を上げた男の人があつ既に酔つ払つてしまつてゐんじやないかというハイテンションで話しかけてきた。

「マジで？」

「早くねえ？」

他の男の人や他のクラスの子がありえないし、というような顔で笑つてゐる。

あの、余計に話し始め辛くなつてゐんですけど・・・・・。でもそんな中、

「タカスン、ファイト！」

「タカスン、一発！」

小声で応援してくれる一人が居た。もちろんこの場に連れてきた佳澄と彩女だ。

「高須です・・・・・・一一年生です。」

よつやく出た声は小さく聞こえなかつたのか、みんなりんの方を

見ながら動きがピタッと止まっていた。

「え？」

思わずリンの口から声が出る。それを皮切りにみんなの沈黙が一気に破られた。

「えつ？ 終わり？」

「嘘つ！ 早つ！」

「つてか苗字と学年だけつて……！」

みんなが大爆笑している。しかしリンには何がそんなに面白いのかわからない。

「えつ？ えつ？」

思わず顔が赤くなつていいくのがわかる。

「タカスン、面白れえ！」

「パネエ！ つてか顔真つ赤やし！」

かわいーいとか言いながら佳澄と彩女も笑つてている。こんな時どうすればいいんだろう？ とか困惑している内に

「この子は高須リン。最近ウチの高校に転入してきたんだあー」

「タカスンつて呼んでね」

と語尾にハートを付けているかのように佳澄と彩女が可愛くフォローワーしてくれた。

なるほど、自己紹介はそんな感じで言つものなのか……と、他の子の自己紹介聞いてた？ と突つ込まれるようなことを今理解した。

相変わらず高いテンションで盛り上がり続けるその場に打ち解けることなく、時間だけが過ぎていく。みんなの話もあまり聞かず、「明日は何の授業があつたっけえ？」とか「体操服忘れないようにしないとなあ。」とか心ここにあらず、という状態で黙々とご飯を食べていると、突然横から男の人の声がした。

「それ、美味しい？」

「へ？」

突然の声にすつとんきょううな声が出た。ずっと下を向いて黙り込んだリンは完全にその場で浮いていた。最初の方は佳澄とか彩女とかが話に巻き込む様な形でなじませようとしてくれていたけど、途中でなぜか席替えがあり、トイレに行つたりする内に席順も最初とはぜんぜん違う場所になり、気がついたら端から一番田という中途半端な席になつていた。佳澄と彩女はリンから一番遠い端つこの席で男の人と楽しそうに話していて、リンが会話に加わることは不可能に近い状態だ。

後で知つたけど、合コンの席替えつて珍しくないらしいね。

まあそれは置いといて、とりあえず話しかけられたビックリした。

「ずっと食べてるよね。大根と水菜のサラダ。」

だつてみんなが食べないからとか、上にのつてのカリカリのちりめんじやこも美味しいとか、頭の中ではそんな台詞が回つてたんだけど、リンはまた止まつてしまつていた。

ビックリしたのは突然の声のせいだけでなく、話しかけてきた人がピンクの頭をしていたから。鎖骨あたりまで延びていてる髪の色にムラはなく、桜のような綺麗なピンク色の髪の毛。他に金髪の人がいたり紫色の髪をしている人がいたけど、やっぱりピンク色の髪の毛が一番目立つていてると思う。だけど目立つのは髪の毛のせいだけじゃない。顔も小さく色白で整つており、体の線も細いからパツと見ただけでは女人と間違えている人もいるだろう。

リンも最初にパツと見た時は女人の人かと思ったくらいだけど、声は意外と低い声だった。そのギャップも加わりリンは箸を口にくわえたまま、ビックリした表情を変えることなく、とりあえず頭を縦に振つた。

「美味しいですよ。」

口の中に入つていたじやこと大根と水菜を飲み込んでからやつと発言した。

「大根、辛くない？」

「全然。」

じゃあ俺も食お、とポソリとつぶやいて自分の皿によそい始めた。「タカスン、こんな時は女の子がお皿にとつてあげるもんだよ！」ええと、名前はなんだっけ・・・？ピンク色の髪の毛の男の人とは反対側の隣の席に座っている、隣のクラスの子がアドバイスをしてきた。ヒソヒソ話ではなく、普通の声の大きさの声で喋るものだから「この子は気が利かない子ですよ」とさらされているのかもしれないけど。でも、人は見た目では判断しちゃいけないと佳澄と彩女で思つたから、アドバイスと捉えておこう。

「いいよ、気にしないで。」

特に気にしている様子もなく、ピンク色の髪の毛の人は言った。自己紹介を注意深く聞いていなかつたから名前を覚えていなかつたけど、その男の人は皇一（けいいち）といった。

この「ウとの出会いで・・・」つづき、この合コンに来た事で人生が変わつたと思つ。

この合コンに来て、「ウと出合えて、良かった。

まだ慣れない場所でやつと居場所を見付けることが出来たよ。

もちろん「ウだけじゃない、佳澄と彩女にも感謝している。私は自分の気持ちを言うのが苦手だから素直に口に出していくといえないと、本当にそう思つてこるよ。

ありがと。

2・初めての集合

「昨日、大丈夫だった？」

人生初めての合コンに参加した次の日の朝、学校に向かう途中で佳澄と一緒にになった。佳澄は「おはよう」の言葉もなく、リンに突然質問してきた。

「大丈夫って、何が？」

合コンのことに疎いリンは佳澄が何を言いたいのかわからない。

「何って・・・・・タカスン、お持ち帰りって言葉知ってる？」

何それ？といつものように表情で語るリンに佳澄はハア～、と深いため息をつく。

「そうだよね、行つたことないなら知らなくても仕方ナイよね・・・

佳澄はブツブツ言いいながらうなだれた。

「それにしても、タカスンはマジにパネエなあ。」

おおっ、今日の最初の「パネエ」は佳澄からだ。佳澄と彩女は二人いつも一緒に居るので佳澄と二人きりになるというのも珍しいけど、佳澄の口から「パネエ」と聞くのも珍しい気がする。もしかして初めてかも？

「あー、いうコンパにはちょっとやなヤツが来る時とか多いからさ、二人で抜けようとか言われたらあぶい時があんだけよ。」

ちょっとや = 早い。ここでは手

が早いという意味で使用。

あぶい = 危ない、危険。

「う、うん・・・・・」

前も言つたけど、私は今時の言葉がわからない。だけど、とりあえず良くない人が来ることがあるということだけは伝わった。

「まさかして・・・・あの人とカレカノになっちゃたりして？」

まさかして = まさか！

と、もしかしての混合語。

カレカノ＝彼氏と彼女の

の関係。

「恋人ってこと？それはないよ。」

「なーんだ。ま、無事ならそれでいいか。」

心配の後は面白い展開を期待するようなキラキラした眼で言われたけど、残念ながら希望に添えることはできない。

「そもそも、地元に彼氏居たりする？」

この一週間、色々と話しかけてきたけど今まで一度もしてこなかつた質問を遂にしてきた。

「・・・・・・・・」

リンは思わず黙り込む。

「えっ？」

予想外の反応だったのだろう。佳澄が驚きの声をあげる。しかしリンの沈黙は彼氏が居ることを表しているのだと、とてもじゃないけどそうは思えなかつた。リンの視線は佳澄の方を向くことなく、ただ進行方向である前方を見つめ、表情は固く、暗くなつている。

「・・・タカスン？」

佳澄はなにかまづいことを聞いてしまつたのだと判断した。

「言いたくなかったら言わなくていいよ。」「？」

リンの表情が少し動いた。横を向くと、隣に佳澄がいない。そう言えば、声は後ろから聞こえてきた気がする。リンは立ち止まつて後ろに振り返つた。

佳澄はリンよりも先に立ち止まり、数歩離れた場所からリンの方を真つ直ぐに見ている。

「タカスンは真面目だろうから、私たちのことチャラくて適当に生きてるとか思つてるかもだけど、私たちは私らなりに、真剣に生きてるんだよ。」

今までの、ずっと笑顔で話しかけてくれていた佳澄の面影は

ない。茶髪で、相変わらずのバッチャリメイクにセットした髪型だけど、真剣な表情をしている。見た目で判断しちゃいけない、って佳澄と彩女を見てわかつていいつもりだった。でも、それはきっと伝わっておらず、不愉快な思いをさせているのかもしない。

「あの、私……」

「だから、言いたくないなら言いたくないって言って？」

傷つけているのだとわかつてリンは何かを言わなくては、という気持ちになつたが、その気持ちは佳澄に遮られた。

「勉強は嫌い。恋愛話大好き。そんな私らを白い目で見たりする人もいるけど、でもダチは大事にするよ。」ダチ＝友達。

瞬きもほとんどせず、佳澄の視線はずつとリンを捕えている。

「それとも私ら、ウザいってずっと思つてる？」

佳澄の顔が少し悲しそうになつた。笑つてはいるけど、眼が悲しさを訴えている。

リンは直に首を横に降つた。すぐに「良かつた」という笑顔に佳澄の表情が変わる。同じくリンも「良かつた」と思つた。

この時、やつと本当の友達になれた気がした。

『屋上に集合！』

可愛い絵文字でカラフルになつたメールを見ながら早速彩女は屋上へと向かう。教室に着いた時、佳澄もリンもまだ来ていなかつた。佳澄は遅刻が珍しくなかつたし、リンはいつもギリギリに来ていたから、二人はまだ学校に来ていないものだと思つていた。なのに屋上に着くと一人がそろつて「おはよう」と声をかけてきた。

「何だ？ 何の集会だ？」

屋上にはまだ佳澄とリンしかいない。授業中の時間には遅刻してきた生徒やサボリの生徒が屋上で時間を過ごすけど、まだ朝のHRが始まる前ということもあり、他の生徒がいない屋上は広く感じられる。

「さあ、タカスンが遅刻したりばつくれたりしないつて

「いつから屋上に集合してみた。」

ぱつ

くれる= たまる。逃げる。

「マジか!? パネエ優等生じゃん!」

世間一般では当たり前と思われていることも、今の「時勢（とうか）」この高校限定? 通用しない。まあ決していいことではないけど。

「それと、昨日の」と聞き出せりと想つて。

「あ、それは聞きたい。」

聞き出すも何も、別に特別なことはなかつたのだけど、「で?」という表情で一人が見てくるから、リンはとりあえず昨日のことを思い出しながら一人に話しだした。

大根と水菜のサラダを食べながら、口ウはリンに続けて話しかけてきた。

「転入してきたつ、て紹介されてたけど、どうから来たの?」

「あ、福岡・・・です。」

まだ一杯目のグラスを持ちながら答える。

「こんなところで敬語はなし! みんなシラケちまつぜ。」

「そ、そうなんだ。そんなものなんだ。

「もしかして、頭数そろえるために連れてこられた?」

「あ、はい。じゃないーうん、そうです。」

とりあえずシラケさせないようにと努力はしてみるものの、すぐ

には上手くできない。器用なタイプじゃないのだ。

くくくつ、と軽く笑いながらコウは話を続ける。

「実は俺も。」

同じだな、という雰囲気に少し緊張がほぐれる。

「多分次はカラオケになると思うけど、もう抜けて帰らない?」

以外だった。カラオケ好きそうな感じがするのに。歌手には髪の

毛を染めている人が多いことから生まれた偏見だが、実際にこの合コンのハイテンションについていけている辺りからカラオケとかノリノリに行きそうな感じがしていたからだ。

「明朝早いんだよ。」

何だ、そういうことか。

「何のバイトやつてるんです・・・やつとうと？」

「お、いいねえ。方言。バイトじゃなくて見習い、美容師の。」

「コウは方言に反応しながらもちゃんとリンの質問に答えた。何でもよく来店する芸能人が明日来店するらしい。仕事の都合で通常の来店時間に来店することが難しいので来店時間の前に特別時間を設けるらしく、見習いであるコウは来店予定時間よりも早くに店に行き色々と準備をしなければいけない。

そんな訳でみんなが盛り上がった飲食店を出た後、一人で帰ることにした。みんなは疑いの目で見ていたけど、おかまいなしに一人で駅へと向かう。平日だというのに、お酒を飲んで楽しそうな人が多い。それにさすが東京というべきか、人が途切れることがない。

「やつと開放されたな。」

上手く人をよけながらコウが口を開いた。まだ少し寒いこの季節、口からは白い息が漏れる。

「うん。」

割と明るい声で返事をする。サラダの後、唐揚げをつつきながらコウと話を続ける内にコウとは気軽に話せるようになつた。

「東京に来て、やっぱり人の多さにビックリした？」

「うん。電車もあれだけ多いのに、なんで常にお多いのか不思議。」

「時間にもよるけどね。」

あの通勤ラッシュ時の人の多さは半端じゃない。テレビで観たことはあつたけど、思つていたよりずっと大変だ。学校に通うだけであんなに疲れたことは福岡ではまずなかつた。

でも、人間というのは時間が経つにつれて、また、経験を重ねる

につれて慣れてくるものだ。ぎゅうぎゅう詰めの電車にも同じ方言を喋る人のいない学校にも少しずつ慣れてきている。

「他にビックリしたことある?」

「東京で生まれ育ったコウは外から東京がどう見えるのか興味あるらしい。」

「学校に図書室がないこと。」

「それはさすがに東京でも珍しいんじゃねえ?」

東京で生まれ育ったコウも初めて聞いた様だった。正確には学校に図書室はあつたらしい。しかし、たまり場には、本を借りる人はほとんど居ないはで学校側がなくしたらしい。一応注意するがほとんど諦めている先生達の、唯一の反撃かもしない。しかし、現在倉庫となっている図書室をサボリ場所にしている人は割と多いと初めて学校に行つた日に先生が教えてくれた。人付き合いが苦手なことから、本を読むことで時間を潰すことが多かつたリンにとっては大きな衝撃だった。かといって自分でそんなに多く本を買うタイプでもない。

「都立図書館に行つたりしねえの?」

「・・・どこ?」

「一週間経つたとはいえ、まだ住んでいる場所の近くのスーパーとかコンビニとかしか知らない。」

「そうか、学校以外で探せばいいのか。」

今、気付いた。学校に通つて、本来存在するものが存在しないと諦めるしかないと思つていた。学校以外の世界をあまり知らないから、そんな発想が浮かばなかつたのだ。

「本当、お面白えなあ。」

またくくく、と笑いながらコウが言つ。

「俺の知り合いが勤めてる図書館教えてやるよ。行けそうだつたら行つて?」

そう言つて教えてくれた図書館は住んでいる場所の最寄り駅と、学校の最寄り駅の間にあつた。定期があるから交通費から考へると

通うことは十分にできそうだ。しかし、駅から一十歩歩かなくてはいけないということから、時間に余裕がないと行きそうにない。けれど、同じ理由からその図書館にはそれほど人が多い訳ではないらしく、人ごみが苦手なリンにとつては好都合だった。

早速明日行ってみよう。

リンはコウと改札口で別れ、ホームで電車を待つ間にそう思った。やつとの東京で落ち着ける場所が見つかるかもしれない、という希望を感じながら。

3・図書館へ行こう

「図書館の場所を教えてもらつただけかぁー」「まあキモくはないけど、優等生タイプのタカスンには合つそうこないよなあー」

屋上での集会は一時間程で終わり、解散後である授業と授業の合間の休み時間に佳澄と彩女はトイレに来ていた。もちろんコンは自分で用がないのでこいつのことはわざわざ付き合はない。

「そろいえはさあー」

洗つた手の水を吹き飛ばすかのよつて手を振りながら佳澄が話しが出す。

「ん?」

「タカスンと朝一緒になつて、もしかして地元に彼氏いたりする? つて聞いたんだよね。」

「うん、うん。」

彩女も恋愛話が大好きで、しかも今まで聞いたことのないリンの話に興味をそそられない訳がない。「早く続きが聞きたい」という台詞が顔に書いてあるかのように表情から見て取れる。

しかし、実際は期待とは正反対の、重苦しい内容だつた。

「沈黙。」

「へ?」

佳澄に続き、付き添いで来た彩女もなんとなく手を洗つ。

「何かトラウマもあるんだろうなあー」

「じゃあこれからもタカスンとコイバナはできないつこと?..」

「コイバナ=恋の話

同じく手拭く物を持つていない彩女も手を振つて水を周りに飛ばしながら、残念そうにつぶやく。

「んー、昨日のことは言つてくれただろ? コイバナではないけど。

彩のコイバナも聞いてたし、難しいとこだなあ。」

実は彩女、昨日来ていた一人といい雰囲気になつてゐるらしい。集会でリンの話が終わつた後、幸せそうにその話をしてゐた。その時リンはうん、うん、と頷きながらちゃんと聞いてくれて恋愛話が嫌いという様には見えなかつた。

「地元の男話だけはしない方がいいってことか。」

「そうなるね。」

トイレの鏡を見て濡れた手で髪の毛をときながら言つた彩女の言葉に佳澄が頷く。

気にならないわけじゃないけど、でも言いたくないなら仕方がない。

「先に言つてくれてサンキュー。つかり聞いてKYになるとこだつたよ。あぶい、あぶい。」

KY=空氣読めない

「でもさあー、あれ超ウケなかつた?」

二人共まだ少し濡れた手のまま廊下へと出る。休み時間の女子トイレは利用者が多く、新しい人がどんどん中へと流れてくる。

「ああ、アレ?」

「「どうしてずっと構つてくれるの?」」

佳澄がふつた話に一人の声がハモつた。そして一人で笑い出す。ハモる

＝シンクロする、かぶる

「何のメリットもないのに、つて〇しかつづーのー。」

キーンゴーンカーンゴーン・・・・・・

チャイムの音が鳴り授業が始まるが、一旦火のついた笑いはおさまらない。廊下ですれ違つ人が不思議な顔ですれ違つていつたけど、そんないは気にしない。結局教室に入るまでずっと笑つたままだつた。

「また明日。」

放課後、佳澄と彩女に挨拶をしてリンは早速コウが教えてくれた
図書館へと向かう。

「アイツ何か暗いよね。」

「佳澄も彩も、あんなのと付き合ってたりつつあるよ?」

リンがドアを出た直後ぐらいに、未だに名前を覚えていないクラスメイトの声が後ろから聞こえてきた。

「ばーか、今ルンルンで帰つてつたじゃねえか。」

「機嫌は超花丸じゃん。」

クラスメイトに続き、佳澄と彩女の二人が言い返してくれる声が聞こえた。リンは喧嘩にならないか少し心配になつたけど、直に笑い声へと変わつて安心する。

わかつてくれる人がいるとこんなにも気持ちが変わる。学校が好きになれるかもしれない。なれたらいい。自分の居場所があるつて幸せなことだと知つていてから、そう思つ。

ここは東京。生まれ育つた福岡とは全然違う。人の数も、電車の数も、日が暮れる時間だつて違つ。でも、どっちにだつて学校はある。福岡で通つていた高校とは雰囲気が全然違うけど、でもここで自分を受け入れてくれる人がいる。それだけでいい。

「ダチでいるのに理由なんかあるか。」

「面白れえから居るんだよ。」

ずっと不思議に思つていた。転入生つてことで最初は興味交じりで話しかけてくる人は多かつたけど、新しい環境での戸惑いや元々の性格から反応が鈍かつたらその内話しかけてくる人は日に少なくなつた。それなのにこの二人はずつと話し続けてくれた。

一人だけで盛り上がりつていてる感も否めなかつたけど、でも挨拶はもちろん、テレビの話題なんかで話をふつてくれたりした。

「何で?私といったつて何のメリットもないのに、どうしてずっと構つてくれるの?」

気がついたら屋上で聞いていた。

佳澄と彩女は一瞬お互いの顔を見て、そしてリンの方を向いて大爆笑した。

「メリットつて……！」

「マジウケるし！」

とつぐに授業は始まっている時間なのに、授業に出ていないことを全く悪びれる様子もなく、手を叩きながら笑っている。

その日の空は雲が少なく、青く澄んでいて綺麗だった。まだ寒さが残っているけど、ほのかに暖かく感じる日だった。その空をバツクにしながら、少し乱暴にわらわらと台詞を言つた二人はとてもかっこ良く、まぶしく見えた。

「いじか。」

「ウが教えてくれた駅を降り、駅前の多くの店から離れほどんど住宅街となつた建物の間を黙々と歩き続ける」と約一十分。図書館と思われる場所に着いた。「思われる」というのは、『図書館』と書かれた看板もなく、人の出入りも見られないから。でも、どうみても普通の家ではない。

近所のスーパー・マーケットよりははるかに小さいけれど、普通の一軒家よりは大きく、外壁は淡い水色。全ての窓にはレースのカーテンがしっかりと閉まつていて、外から中の様子を見ることはできない。入り口のドアは見るからに自動ドアでなく、押したり引いたりするタイプのドア。

パツと見た感じ、知らないと絶対に通り過ぎるタイプの建物だと思う。

キイツ

入り口の前でじばらく立ち止まつていると、ドアが開いて中から

人がてきた。

「やっぱカンジかつけえ。」

かつけえ〃かつこいい

「そうか？客を追い出すなんてなんつー店員だよ。」

訂正。今出てきたのは人ですか？と思わず目を見張つた。

贊否両論の『贊』の声を上げていたのは金髪にバッチャリというか、どきついメイクで元の顔なんかわからないほど黒い顔をして、緑色のミニのワンピースを着た人だつた。下着が見えそうなほどミニのワンピースの上にはゴツゴツしたベルトが光り、足はヒールの高いブーツで決めている。おそらくサロンで焼いたのであろう黒い肌に、黒のマスカラやアイラインなどをしつかりと使っていてとても同じ日本人には見えない。

そして『否』の声を上げていたのはピンクのTシャツの上に紫のダウンジャケットに黒のショートパンツ、そして『贊』と同じくヒールの高いブーツを履いている人。肌の色は同じくサロンで焼いているのだろう、日本人離れした黒い肌をしている。しかし、何より驚くのは目を中心に顔の半分が黒く塗られている。とても同じ人間とは思えない。

しかも、ほとんど住宅街の、そして図書館であるはずのこの建物から出てくるにはとてもおかしな光景だつた。

「かつけえから許す。」

「まあ顔は悪くねえな。」

リンの視線を全く気にする様子もなく、二人は喋り続けながら歩いていく。

さすが東京。初めて見る光景が多い。

「浦田さん、このドア何とかなんないですか？」

歩いていく二人の背中を見ながらボーッとしていたリンは男の人の声で現実に引き戻された。

「うーん、そうだなあ。どうすればいい？完司君。」

かんじ

建物の奥から白髪混じりの少し背の低い、おつとつとしたおじさんがてきた。

肝心のドアははといつとわつき勢いよく開けられたのか、閉まる」となく外の風を建物の中へと運んでいる。

「いや、俺が聞いてるんですけど。」

その男の人は口の知り合いの人だと直感で分かった。
少し短い長さの髪の毛は茶髪で、耳にはそれほど大きくないピアスをしている。背は平均的で、桜色の髪の口と比べるとそんなに目立つタイプではない。しかし、切れ長の目にきりっとした顔つきには男らしさを感じる。

「本を読みに来たの？お嬢さん。」

「口の知り合いと思われる人をまじまじと見ていると、おつとりとしたおじさんが話しかけてきた。

「あつ・・・・・はい。そうです。」

「どうぞ、中に。」

一ツ口ごとに笑って中へと誘導してくれる。

「あ・・・・・はい。」

ぎこちなく返事をしながら、迎えてくれたその建物の中に入る。

「もしかして、口の知り合い？」

ドアを閉めながら質問された。もう伝わっていたのか。リンはこくん、と首を縦に振った。

「本当に来てくれたんだ、ありがとう。リン、だっけ？名前。」

笑顔でお礼を言われた。まぶしい笑顔だ。それにしても名前まで伝わっていたのか。

「俺は完司。気の済むまで見てつてな。」

優しく話しかけてくれる。確かに口を出してくれた人の片方は文句を言っていたけど、いい人そうに感じる。

館内に入つて中を見回すと、決して多いとは言えないけど、十分な量の本が並んでいる。東京に来てまだ一度も本屋に行つていらないリンには懐かしい光景のように思えた。

「はい。」

嬉しい気分が顔に滲み出ているのが自分でもわかる。完司も答えるようにまた笑顔になった。

「バンド仲間？」

「そ。」

完司は自販機で買った缶コーヒーをリンに手渡しながら答える。久しぶりの本にウキウキしていると、館内からはほとんど人がいなくなり、時間はすっかり夜になっていた。もともと人はそんなに多くかつたが、新聞や雑誌をずっと読んでいる「老人」がいたり、子どもと一緒に来て次に借りる本と一緒に探す「主婦」がいたりと、決して人が少ない訳ではなかった。

しかし、閉館間際になるとさすがに少なくなる。本を読む場所だという理念から館内での自習を禁止しているため、リンと同世代の人がギリギリまで居座ることもなく、ほとんど住宅街の中にある図書館周辺は暗く、寂しい場所だと言える。

そのことから完司がリンを駅まで送ることになった。最初は断つたのだが、浦田さんといつおじさんも「送つてもらいなさい」というものだから結局好意に甘えることになった。

「あ、お金。」

「いいつて。」

「でも」

こんな風にさりげなく奢られる「人に慣れていないから、戸惑わずにはいられない。」

「社交辞令じゃなくて、本当に来てくれたお礼ってことで。」

つき返せないような、もつともらしい理由を付けられた。

「あ、じゃあ頂きます。」

ペコリと頭を下げながらリンはお礼を言った。

「バンドでは何の担当をしているんですか？」

「ボーカル。コウはドラムだよ。」

「あ、もしかして日本人離れした一人組みはファンの方ですか？」
館内に入る前にすれ違った二人のことを思い出した。バンドの追っかけをしているのなら、あんな格好をしているのも場違いなあの場所に居たのも頷ける。

「うん、一応。でも日本人離れって・・・浦田さんと同じこと言つてら。」

完司はフツと笑いながら答えてくれた。やつぱりそうだったんだ。
「応援してくれるのはありがたいけど、図書館に来てギャー、ギャー騒ぐのはやめて欲しいよな。本も読まないくせに。」

どうやら片方が完司の熱狂的なファンで、入るのはタダだし、という考え方で押し寄せてきたらしい。飲み食いするは注意したら黄色い声をあげるはで本当に迷惑だった様子が完司の話し方から分かる。

「図書館、好きなんですね。」

アルバイトだから仕方なく、じゃない。本へ、そして本を読みに来る場所である図書館への愛を感じる。

「バンドマンなのに、変だろ？」

否定せず、笑いながら言つ。

「え、何ですか？」

「何でつて・・・仲間とか、他のバンドの奴らに知られたときに言われたぜ。『今まで色んなアルバイトの話を聞いてきたけど、地味な図書館で働いている奴始めて聞いた』って。自分でもそう思つし。」

キヨトンとした顔をしながら質問してくるリンに完司は少し驚いた。今まで明るいステージ上ではハジケで歌つてはいるのに、普段は暗い図書館で働いているなんて、っていう反応しかされなかつたらだ。

「地味だなんて、ひどいですね。図書館は素敵な場所なのに。」

つるさい音もなく、純粹に本が好きな人達が憩いを求めてやつてくる。そんな落ち着く場所なのに。

「お、わかつてゐねえ。」

少しふーとしながら図書館をかばうコンに好感が持てる。

「それに、音楽も文学もどつちも同じ芸術なのにね。」

「・・・・・・・・・・・・」

思わず完司の歩く足が止まってしまった。

コンはあまり深く考えずさりと話したのだらうなと、でも心に響く一言だった。

じくん

完司の胸が大きく鳴った。

(こやこや、氣のせいだ。)

「どうしたんですか？」と振り返るコンを見ながら心の中では否定したが、完司は自分の顔が赤くなっている気がした。

まだ明るい駅前までたどり着いていなくて良かったと思った。

4・芽生えた気持ち

「マジか！？」

お昼休み、みんながご飯を食べている教室の中に彩女の声が響いた。

「そつかあ、でも佳澄意外と成績いいしなあー」

「『意外と』は余計だ。」

言つちや悪いが、リンもビックリした。

何の話かというと、進路の話。もう春も近づいていの今、高校二年生の終わりのリン達は自分の将来について具体的に考えなくてはいけない。

「親が金のかからないとこしか無理つていうし。」

進路に合わせて三年のクラスは分けられる。一応二年生である今も大まかに理数系と文系に分かれているが、三年はそれに加えてそれぞれ国立クラスと私立クラスに分けられる。佳澄の親の言う、金のかからないとこ＝国立・県立の大学を指すのだろう。

「だから国立クラスの希望になる。」

「そつかあー、三年も同クラスになれるいいなって思ったのになあー」

同クラス＝同じクラス

「ごめん。」

「いや、謝んな。仕方ねえよな。」

彩女はヘアメイクの専門学校を目指しているため文系の私立クラス希望となる。同じ文系とはいえ、国立希望の佳澄とは違うクラスになることが決定したのだ。仲のいい二人が寂しくないわけがない。二人とも少し暗い表情になつた。

「とかしんみりしたのに、成績であぶれたりしてえー」

暗い顔から一転、いじわるな顔で彩女が佳澄をからかう。

「言つた。シャレにならん。」

さつき成績がいいとか言っておきながら真逆のことを言うのは不思議だが、暗い雰囲気が続かなかつたことに安堵の息が漏れる。

「タカスンは？ やつぱ国立？」

最初からわかっているかのように彩女が質問していく。

「うん、一応。」

リンは匂い飯の菓子パンを食べながら返事をする。今のところ行きたい大学も学部もないけど、将来の選択肢を広げるために国立口号に進む予定だ。

「何か先口一が言つてたらしいよ。この学校始まつて以来の快挙があるかもつて。」

「へ？」

『先口一

』先生のこと。

佳澄が何やら不吉なことを言つ。

「職員室に行つたやつが聞いたつて。タカスン、前行つてた学校、超進学校だつたんだつて？」

「マジ！？ あ、でも、つぽいねー」

つぽい＝それつぽい

どこの情報か知らないけど、先生達そんなこと話していたのか。

「『超』がつくかは知らんけど、一応進学校だつたかな。でも、バリバリ勉強して入つた学校だし、学内の成績は下の方だつたから、そんなに期待されても困るつちゃけど。」

「『ちやけど』！？」

「タカスンの方言初めて聞いた気がする！」

思つてもいない反応が起つる。

「あ、『ちやけど』つて方言なんだ。知らなかつた」

「福岡つて方言強いイメージあんのに、タカスンあんま使わないよなあー？」

「ドラマとかですげえのにな。」

やつぱりテレビの影響つて大きいんだな、とリンは感じた。

「でもテレビでよく聞くような方言、若い世代はあまり使わないよ

？」

「「マジか！？」」

一人の声がハモリ、さつきの彩女の時より声が大きく教室に響いた。リンにとつてはそこまで驚かれたことが驚きだ。リンはテレビでよく聞くような強い方言を使う人は若い世代では今まで会つたことがない。実際にはいるかもしないし、地域によって方言もさまざまだから断定はできないが。

「方言つて憧れるよなー」

「そなんだ。」

方言のある地域で生まれ育つたリンには理解できない気持ちだった。

結局その昼休みは方言の話で盛り上がり、リンの通つていた高校の話は流れた。それに少しホッとした自分にリンは気付いていた。

元々皆が思つてゐるほどの方言を使つわけじゃない。でも、方言が抜けてきているのも否定できない。

・・・「うん、自然に抜けてきてるんじゃない。きっと意識的に使わないようにしているんだ。

あのことを思い出しながら。

「こんにちは。」

放課後、今日も図書館へと立ち寄つた。今日は昨日入り口で出会つた二人に会つこともなく、まっすぐに中へと入る。本を返却するカウンターには完司がいた。

「おっす。もう読んだんだ！？」

「はい、一冊だけだつたですし。」

挨拶とともに会話が始まる。

「でも昨日帰るの遅かつたのに。睡眠時間削つて読んだのか？」

「授業中寝てるから平気・・・」

途中でハツとして言葉を止めた。完司がオイオイ、という顔をしている。

「じゃなくて授業と授業の合間にね。」

「へへッと笑いながら言い直すが、誤魔化せるわけもなかつた。」

「まあいいけど。でも意外だな。」

リンの返却した本をチェックしながら完司はボソッと言つた。

「へ？ 何がですか？」

「授業とか真面目に聞きそつなタイプなのに。」

『真面目』。確かに見た目はそういうタイプかもしね。髪は染めていないから真っ黒だし、化粧はしていない。スカートも買った時ままの長さで膝が見える程度。同じ高校の、髪を茶髪に染め、バツチリ化粧をして元々長くないスカートをさらに短くしている子達と比べると優等生に見えるだろう。

でも、福岡の制服はセーラー服でスカート丈は膝下だつたから、ブレザーのスカートだけでもリンにとつては十分に短いと思つたのだけれど。

「見掛け倒しですよ。」

リンの口から少しトーンの低い声が出た。完司が「えつ？」と顔を上げる。

「お勧めの本何があります？」

完司の反応を無視してリンの視線は他の人から返却された本の方にある。

「あ、これ、最近映画化した。」

さつき戻ってきたばっかりの本を完司が差し出す。携帯小説として話題を呼び、最近映画化した作品らしい。

完司から本を受け取りパラパラとめくる。携帯小説が原作ということで文章が横書きで書いてある。最近は珍しくないらしいけど、

携帯小説を読まないリンにとつては不思議な感じがする。

めぐり終わつて表紙を閉じると後ろ表紙に書いてあるあらすじが

目に入った。

『こんなに人を好きになつたのは初めて。だけど、彼が突然留学することになり・・・・100万人が泣いた感動のストーリーがついに書籍化!...』

リンの表情がみるみる暗くなつていくのを完司は見逃さなかつた。

「リン・・・・？」

不安になつて思わず声をかけるけど、リンの視線が完司の方を向くことはなかつた。

「『みんなさい、』『純愛ストーリー』も横書きで書いてあるのも苦手なんですよ。」

やつ言つてリンはカウンターの上に静かに本を置き、完司に背を向けて歩き出した。歩く先には昨日借りた本と同じジャンルである推理小説が並んでいる。リンは何事もなかつたかのように読む本を選び始める。

完司は向けられた背中からじりじりと眼を離すことができなかつた。頭の中にはさつきのリンの暗い表情がずつとこびりついている。

（俺じや、力になれないのかな。）

完司は昨日の夜の胸の高鳴りを思い出した。やつぱり『氣のせい』なかじやなかつた。

（やべえ、俺）

また自分の顔が赤くなつていいくのがわかる。

（リンのこと、好きになつたかも。）

自分の気持ちに気付くと恥ずかしさがこみ上げてきて全身が熱くなつた。

もつと近づきたい。

わつきのよつた暗い顔をわせる原因から救つてやりたい。

本を返しに来た人が困ったようにカウンターの前に立ち尽くしていたが、完司はどうしてもリンの背中から視線を外すことが出来ずにしばらく気付くことができなかつた。

5・浦田わんワールド

「「めん、待つた？」

「いえ、今来たとこです。」

まるでカップルのような会話に「じくん」と胸がなり「俺は中坊かー」と思わず俺は心の中で自分につっこんだ。

だけど今まで付き合つた時は女の子の方から告白しててくれたので、自分が先に好きになるのは少し変な感覚だ。

さて、何でこんな展開になつてこるのかといつと、話は昨日にさかのぼる。

「若いつていいねえ。」

「！？」

リンの背中をずっと見ていた俺はいきなりの浦田さんの声に驚き、声にならない声を出した。いや、でもそれでよかつたかもしれない。静かな館内を乱すことにならなくて良かつた。なんて図書館バカな俺。そしてそんな俺を無視してカウンターごしに本を返却するおばさんに挨拶をする浦田さんがひどく落ち着いて見える。

つて、今の俺バツチリ見られてた！？

また全身が熱くなる。案の定、バツチリ見ていたみたいで、おばさんとのやり取りを終えた浦田さんは俺の方を向いてニッコリ笑つた。

「え、もう帰るのかい？」

リンが「今日は早めに帰ります」と言つてカウンターに居る浦田さんに挨拶をした時、浦田わんは「まだ帰らないで」とこつ反応をした。

「えつと・・・何か都合悪いですか？」

思わず困惑うっこ。

「もう暗いよ。完司君に送りせんから、ひまつと待つて。」

「え、とんでもないです。」

リンは昨日送つてもらつたことに少し申し訳なさを感じ、今日は早く帰らうと思っていた。しかし、東京のほうが福岡よりも日が暮れるのが早いことを忘れていたため、気付けば外は暗くなつていた。

「危ないよ。」

「でも・・・。」

昨日は閉館後だつたからまだしも、今日は閉館までもまだ時間がある。そんなに迷惑をかける訳にはいかない、とリンは躊躇している。「いいのいいの。いつもはこの時間駅に朝一はんのパンを買いにいくんだけど、今日は完司君に買つてきてもらひうから。」

浦田さん、ナイス・・・！

本を棚に並べながら聞こえてきた会話に俺は思わずガツツポーズをする。

「やつぱり、悪いですよ。」

「いいよ、遠慮すんな。」

嬉しいのを勘付かれない様、完司はカウンターへとせりげなく近付く。

「じゃあ完司君よろしく。あ、それとコト。」

浦田さんがエプロンのポケットをじんじんとあせつ、紙切れを取り出した。

「知り合いにもらつたんだけど、私は興味ないから完司君と一緒に行っておいで。」

そう言つて取りだされたのはお笑いのチケット一枚。

「次の月曜日、学校終わつてから暇かい？」

「今のところ予定はないんですけど・・・。」

何のチケットか確認できないまま、リンはただ浦田さんの質問に答える。

「じゃ、よろしく。」

浦田さんは有無を言わさずにリンの手にチケットを渡す。その光

景を見ながら俺はビックリ仰天していた。

浦田さん、あなたお笑い大好きじゃないですか！昼間とか人が少ないとときに仕事を全部俺に任せて控え室でしおつちゅうお笑いのDVD観ていろじゃないですか！そしてたまに笑い声を館内に響かせて俺が気まずい思いをしたりしているじゃないですか！！

と、心中で叫ぶだけにしておいた。浦田さん、アンタ最高です。「わうと決まつたらござと叫うときの為に連絡先交換しておきなさい。」

アンタ呼ばわりしてすみません！それにしてもすげえ、浦田さん。これからは浦田さんが笑い声を館内に響かせても、怒鳴らずに優しく注意しようと思います。

（浦田さんの笑い声よりも完司の怒鳴り声のほうが気まずい雰囲気を漂わせていることに完司は全く気付いていない。）

「あれ？？」

お笑いの会場に辿り着き、座れる場所を探していると見覚えのある桜色が見えた。

「「ウ？」

「嘘つ！？」

俺は思わず嫌そうな声を上げてしまった。

「リン！それに完司も・・・。ハーン、今日用事があるからと俺の誘いを断つたのはこうこう理由だったのか。」

「ウが少しニヤニヤしながら叫う。昨日の夜リンを駅まで送り、自分の家に帰ると、ウから電話があった。今日出かけようと言つ誘いだったが、もちろんリンとの約束があるので断つた。まさか同じ行き先とは思わなかつたし。

「二つちの方が先約だつたんだよ！それに浦田さんがビッグしてもって言つから・・・」

「言つてないけど、そういうことじててくれ。

「わかつたわかつた。」

「コウが笑いをこらえながら言つ。

「コウはお笑いが好きなの？」

いつの間にかコウの隣に座つているリンはコウに話しかけ始めた。「ん？ 嫌いじやないよ。でも今日来たのは美容院の先輩の知り合いが出るからなんだ。」

「じゃあ、今日はその先輩と来てるの？」

何か俺と話す時よりリラックスしているように見えるのは気のせいかな？

「それがいきなり昨日体調崩しちゃつてさ。代わりに誘つた完司も駄目だつたし、他のメンバーと来てるよ。今トイレに行つてるけど。

「え、今日バイト入つてなかつたんだ。」

「偶然な。」

今日は月曜日。完司の勤めている図書館とコウの勤めている美容院は定休日だ。だけど、他のメンバーはアルバイトをしていて、決まつた定休日がないので突然誘つて捕まることが滅多にない。

「おっ、完司じやん。と・・・・誰？ 完司の新しい彼女か？」

話をしていると噂のメンバーが現れた。

「違う！ 図書館の常連さんだよ！」

と言つても先週初めて來たばかりですが。

「高須リンです。」

リンはその噂のメンバーのオレンジ色の頭から視線が離れないまま軽く自己紹介をした。

「どうも、雷です。ギター担当、宜しく。」

そう言つて雷は手を差し出した。リンも特に抵抗することなく握手に応じる。雷は人見知りをしない性格で、相手が緊張していようがすぐに打ち解けることができるタイプだ。俺は一人の握手を見ながら何だかモヤモヤと少し嫌な気分がした。

「俺も高校生だよ、高一。」

雷がリンの制服姿を見て高校生だと気付く。

「あ、私もです。」

「タメなんだから、敬語なんて使うなって。」

「あ、はい。じゃない、うん。」

「俺らの知り合った時と同じような会話だな。」

リンはコウと雷の三人で盛り上がり始めた。しまった、出遅れた。俺とはそんな会話なかつたなんて拗ねてる場合じゃねえ。浦田さんの影響からか、名前を「君」付けで呼ばれて、ずるずると敬語を使われている関係から抜け出すチャンスだ。

「俺にもタメ口でいいから・・・」

全部言い終わる前に明かりが落ち、俺の言葉は黄色い声にかき消された。お笑いのライブが始まってしまったのだ。

何でタイミングの悪い・・・。

ライブはそれなりに楽しかったけど、俺が終始落ち込んでいたのは言つまでもない。

「もうこんな時間だし、飯食いに行こうよ。」

「いいねえ。」

ライブ会場を後にしながら雷の誘いにコウがのる。ライブが終わった夜八時ごろ、確かにお腹は空いている。

「リンは？」

「行こうかな。」

「よし、決まり」

おい、俺の意見はー?と思つたけど、断るつもりは別にないので黙つて付いていく。こういう時は雷のバイト先のうどん屋に行く流れだ。そのうどん屋に着くまでリンはほとんどずっと雷と喋つていた。もちろん俺やコウとも喋つたけど、同じ高校生同士、話も合つのだらう。そんな二人を複雑な気持ちで後ろから見つめていた。

「あれえ?みんなそろつてどうしたんだ?」

うどん屋に入ると驚きの声を上げる空色の頭の男が居た。

「何、この偶然は。」

「コウも驚きの声を上げる。

「今日も食いに来てくれたのかよ、毎度」

雷が嬉しそうな顔をしている。

「先輩が奢ってくれるって言つからひで、天ぷらも頼んだぜ。で、その子は誰？」

雷と同じようにリンに反応する。

「高須リンです。亮司君の勤め先の常連です。」

おおっ、自己紹介が少し長くなつた。しかも俺が言つた言葉を足して。

「へえー。浦田さんいいおつちやんだよなー。」

ユキが自分の横の座席を勧めながら浦田さんの名前を出す。いつも、浦田さんはいいおつちやんだ。

「ですね。」

リンが少し微笑みながら返事をする。

「ユキ、ユキの自己紹介がまだだよ。」

ユキの隣に座つたコウが促す。

「あ、そうか。失礼。幸雄です。ユキって呼んで。」

雷がユキの頼んだと思われる「うどんと天ぷらを運んできている。

「これでバンドのメンバーが全員揃つたな。」

テーブルにうどんと天ぷらを置きながら雷が言つた。

本当だ。しかもこんな偶然で。一体どんな糸で結ばれているんだ、俺らは。

「全員で五人なんですね。」

リンはほのぼのと言つ。

「…………えつ？」

四人の反応が一緒だつた。

五人！？俺、コウ、雷、ユキの四人なんですけど。

「いや、俺は違うから。」

「！？」

全然視界に入つていなかつた場所から声がして驚く。

「あ、この人は俺のバイト先の先輩。」

ユキが説明する。

「リン、ナイズボケ。」

雷がつつこむ。

「本当、面白えやつ。」

「コウがくくつと笑う。」

どうやらユキの先輩が視界に入つていなかつたのは俺だけらしい。

「あ、失礼しました！」

少し顔を赤くして照れているリンがいつもより可愛く見えた。

「いやあ、ビックリした。」

ユキの先輩も笑っている。

それから帰るまでは笑いが全然絶えなかつた。

リンも今日はよく笑つてゐる。

この笑顔がずっと続けばいい。

リンの笑顔を見ながら、俺は強くそう思つた。

「え、この図書館に住んでたの？」

お笑いライブを見に行った次の土曜日、休みといふことからリンは昼ご飯を食べてすぐにいつもの図書館に来ていた。何も変わらない図書館だけど、いつもと違うのはリンがエプロンを着て、完司の隣に立つていることだ。

「うん。高校通つてた時。親と上手くいってなくてさ。しばらくここに寝泊りさせてもらつてたんだ。今はアパート借りて一人暮らししてる。」

土曜日といふことでいつもより人は多い。しかし、休みといふことで図書館の中でもつたりする人が多く、カウンターでの仕事はそれほど多くない。そのことからリンと完司は小さい声で雑談している。

それを見越してからなのか、浦田さんはちよつと外に出てくる、と言つてリンにエプロンを預けて姿をくらましてしまつた。

「浦田さん、どこ行つたんだらうね。」

「悪いな、リン。」

完司はリンといふしてカウンターといふことに幸せを感じ、少し戸惑つているリンに感づかれないように一応謝罪した。それにも今話がとんだな。

あのお笑いライブ終了後、夜ご飯を食べに行つた日からリンが少し打ち解けてくれているように完司は感じていた。その証拠に、一度は遮られた願いだつたタメ口で話してくれるようになった。でも相変わらず

「ううん。浦田さんは完司君にとつてお父さんみたいな存在?」

『君』呼ばわりのままだけど。ま、いつか。

「みたいっていうか、本物の親父より親父っぽいけどな。」

嘘じやない。完司は今も親父のことが好きになれず、ずっと連絡

もとつていなない状態なのだ。

「そうなの？」

「うん。」

「あ、こんなにちば。」

少し気まずそうになつたリンは、本を借りにきた小学生が来てホツとしたように見えた。さすがというか、手続きのやりとりを教えたつもりはないけど毎日来ているだけのことはある。特に教えることもなく淡々と、聞違えることなくカウンターの仕事をこなす。

「・・・・・・・・・・。」

小学生が帰ると沈黙になつた。リンはやつときは話題を変えようと思つたものの、新しい話題が浮かばなかつた。

「気まずさを感じる必要はないから。」

その様子を察して完司が言つ。

「昔は本当に仲悪かつたけど、今は普通の話へりこはしそうと思えばできるから。」

“ しょひと思えば” つまり、あまり話したくないと言つことか。 「昔はどつ接すればいいのかわからなかつたんだ。ずっと親父から逃げてた。高校も行く気にならずにサボつてフフフフしたりして。でもそのおかげで浦田さんに出来たんだけどな。最初は浦田さんのことも受け入れなかつたけど、今じゃ感謝してるよ。」

会話の始まりは、なぜここで働いているのかだつた。リンもアルバイトを始めよつと思つて、どういう経由でこの図書館で働くことになつたのかを聞いてみたのだ。しかし、アルバイトだと思つて完司は立派な職員で司書の資格も持つていて、完司が言つには「 気付いたら浦田さんに促されて取つてた。」 らしいけど、完司の想いがないと取れないものだと思つ。

「まぶしいなあ。」

「え？」

「私、将来の夢がなくて。」

また話がとんだ氣がする。まあ女の子の話つてそんなものだよな、

と完司は心の中で納得する。

「図書館も好きだし司書だつて素敵だと思つけど、自分がなりたいかつて思つと何か違うんだよね。」

特に理由はない。でも、リンは自分ががやりたい仕事とは違う気がしていた。

「あまりたい職業もその理由もハッキリしている人はリンぐらいの高校生だとそう多くないと思つけどな。」

資格思考の強くなつてゐる今の世の中、大学のカリキュラムにあらしどりあえず取つておくか、という気持ちで司書の資格を取得している人は少なくない。でもその中で資格を利用している人はどれだけいるのだろう。

リンは完司の言つことももつともだと納得している。進路のことでは迷つてゐる人は同じ高校にもたくさんいる。でも、いつも一緒に居る彩女の希望進路が固く決まつてゐるのでどうしても焦りが生じてしまつ。彩女がヘアメイクの勉強をしたい理由は「好きだから」。単純に思える理由だが、一番大事な理由だと思つ。

「アルバイトすんのはいいんじゃねえ？きっと新しい世界が見えてくるよ。」

「ここで雇つてあげられたらしいんだけどねえ。」

いつの間に帰つてきたのか、そして背後に回つていたのかわからないうが、突然浦田さんが会話に入つてきた。

「でも今日はちゃんとアルバイト代渡すからね。」

「とんでもないです！ほんとこここに突つ立つてゐるだけなんで。」

「若者が遠慮するんじゃないの。」

「でも・・・」

リンの次の言葉が出てこない。浦田さんの勝ちだ。

「そ、くれるつていうんだから貰いなよ。自分が望んでいなかつたとしても、今俺が助かつてるのは事実だから。」

嘘じやない。正直いつ居なくなるか分からぬ浦田さんにカウンターを任せのよりも、リンにカウンターを任せたほうが安心して本

棚の整理なんかができる。浦田さんの言つとおり、リンをアルバイトとして雇いたいくらいだ。

だけどころは図書館。学校にある図書館じゃなく公共の図書館は国立だと都道府県、それ以外だと市区町村によつて管理されていて、自営業みたいに「あと一人雇おう」とか勝手にすることができない。ところはそんなに利用者が多いわけじゃなく、経費削減とかで司書として勤務しているのは浦田さんと完司のみ。他にはパートの掃除のおばさんがいるくらいで、休む時には代理の人がどこからともなく派遣されてくる。だけど正直一人くらいはアルバイトを雇つて欲しいとは前々から思つていた。

仕事は本の貸し借りを行うだけでなく色々ある。毎日ぐちゃぐちやに並び替えられる棚の本を整理し直し、新しい本の購入も膨大なリストから選ぶ。専門書もどれくらい購入したらいいのか頭を悩ませるし、本の場所を聞かれて案内する間にカウンターに人が並んで不機嫌そうな顔をされることもある。あの雑誌も置いてという利用者をなだめたり世間話に付き合つたり・・・世間の皆さんが思つてゐるよりは意外と忙しい職業なのだ。いつ居なくなるかわからない浦田さんとよく一人で成り立つていると思う。まあいつ居なくなるかわからないことを除いては浦田さんは優れた司書だと思うけど。それはさておき、リンのアルバイト代といつのはおそらく浦田さんのポケットマネーから出されるのだろう。仕事をしていないのだからそれくらいは当然だと思つ。

「いいのかなあ。」

「まーだそんなこと言つてる。」

今日もリンを駅に送りながらリンのぼやきを聞いた。お笑いライブに行つた次の日からも毎日図書館にくるリンを駅に送るのはほとんど日課となつていた。最近真つ暗になつてから帰ることはなくなつたものの、館内に人が少ない時は浦田さんの配慮で駅まで送るごとなつてゐる。帰りには浦田さんに頼まれたパンをちゃんと買つ

て帰るので、リンも遠慮しなくなつた。

「だつて、結構入つてるよ？」

「自給千円とか普通だろ？」

「高いと思つ。」

福岡にいる時に飲食店やコンビニでアルバイトの募集を見たことがあるが、高校生の自給なんて六百八十円とかだ。今日は六時間手伝つたのだが、福岡でアルバイトした時と比べると収入が一千円近く違う。だけど東京で生まれ育つた完司にとつて、その感覚は理解できないうであらう。

「そういうえば、完司君つていくつ？」

また話がとぶ。でも完司はもう慣れた。

「今年で成人になりました。」

「ということは二十歳。」

「へえー。」

納得したようにリンが反応する。

「丁度それくらいに見える？」

「うん、お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒。それくらいかな、と思つたから。」

「兄と姉がいんのか。・・・ん？双子？」

“お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒”といつことはそういうことだよな。

「うん。」

リンは笑顔で返事する。きっと一人のことが大好きなのだろう。

リンと知り合つて約半月、初めてリンの口から家族の話題が出る。

「上の二人は大学？福岡に居るのか？」

「うん。二人共実家から通つてるよ。」

初めて「ウからリンのことを聞いた時、福岡出身だということも割と最近転入してきたらしいといふことも聞いていた。でも、聞いていただけだつた。

「“実家から”・・・・？」

何か引っかかる違和感があった。

「お前、今一人暮らしなの？」

東京に来たのは親の仕事の都合だとばかり思っていた。大学生である上の一人が福岡にいることもおかしいことではないし、家を売らずに置いているならその家から通うのもおかしくはない。だけど親が東京に来ているのなら福岡の家は今“実家”とは言えないんじゃないか？

ヒュウッ

突然の強い風が二人を通り過ぎていった。リンの髪の毛はつなじが全部隠れるくらいの長さで、結ぶほどの長さはない。その髪の毛がリンの顔を覆い、表情が見えなくなつた。

風が止んだ頃、リンの髪の毛は少し乱れていたけど表情は充分に見て取れた。

笑つてはいたけど、悲しそうな笑顔をしていた。

初めて見るリンの表情に、完司は金縛りにあつたように何の反応もすることが出来なかつた。

7・ライブへ行こう

「「ライブー?」

春の面影を感じるようになつてきた頃、朝の教室で佳澄と彩女の声が教室に響いた。その理由はリンが佳澄と彩女をライブに誘つたからだつた。リンから誘われるどころか“ライブ”という言葉が出てくるとは思つてもいなかつた一人は思わず絶叫してしまつた。

「チケット貰つたんだけど、行つたことないし三枚くれたから一緒に来て欲しいなつて思つて・・・・・」

兄弟のことを初めて完司に話した日からもう何日も経つていた。世の中が盛り上がるバレンタインの日、折角なので完司と浦田さんにつつも通り図書館に行つた日に手作りのチョコクッキーをプレゼントした。佳澄と彩女にも好評だつたチョコクッキーを受け取つた浦田さんからはまたお笑いチケットが、そして完司からは自分が出るライブのチケットを渡された。

あの日から完司は少し気まずそうに話しかけてきていた。家族のことをおれ以上聞いてくることはなく、またその話題に触れないよう気につけているのがよく分かつた。

「NEX!? 知つてるし!」

彩女がチケットを見ながら驚く。彩女の元彼がバンドマンだつたらしく、同じステージに立つ事があつた完司のグループを知つていたのだった。佳澄は彩女に付き添いライブハウスに行つたことはあるものの、NEXを見た事はなかつたので彩女のような反応はなない。

「コウくんもあのバンドにいたのかあー

「でもそれっぽいよなー

合コンで少しあ喋つたらしく、一人共コウのことを覚えていふうだ。

ドラム担当で前に出でてくることも出来ないので、記憶に残らない

のは仕方ない氣もする。口ウの桜色の髪の毛も、街中に出れば田立つかもしないが、色とりどりの髪の色が密集するバンドマンの中ではそう田立ちはしないだろ？

「NEXって結構人気だぜ？」「

ライブハウスに出るようになつてまだ一年も経たないらしいが、単独ライブの話を持ちかけられるなど人気は結構あるようだ。図書館にまで追っかけが来ていたぐらいだから、納得はできる。

「ライブとか彩に付き合つて行つてた以来だから、いつぶつだ？」

「夏休みに行つたよな？」

その日はオールで遊んで、と楽しそうに一人が思い出しに浸りだす。

「で、ライブの話ね。行く行く。」

少し一人で盛り上がつた後、ようやく本題に戻り彩女がリンに返事をする。

「でもさあー、タカスンつてどんな服着んの？」

「うう・・・」

佳澄の質問に思わず声が詰まる。そう、リンは服装のことが一番気がかりだったのだ。佳澄や彩女は学校同様、私服もミニスカートが多く、夏は上キャミソール一枚が当たりらしいがリンはとてもじやないけどそんな服装できない。

「まあタカスンは清純派だからライブに行くよつた服持つてねえだろ？」

言葉に出すまでもなく、見抜いている彩女の言葉にリンは黙つて頷く。

「よし、じゃあライブの前に彩の家集合な！」

楽しそうに彩女が決める。自分でなく、人のへアメイクを考えるのも好きなようだ。佳澄も楽しそうに「おうう」と返事をする。少し緊張混じりでリンも返事をした。

決戦の金曜日、学年最後のテストのことをほのめかし始めた授業も終わり三人で彩女の家に集合した。彩女は家に着くやすぐにリン

に服を手渡した。『うつせり昨日までに考へていたようだ。

「超似合つてゐるし。」

「み、短くない？」

リンに着せられたのは膝上15センチのグレーのワンピースインナーの上に膝上20センチの赤色のロングニットの重ね着だった。ワンピースではないのに、ワンピースのように着るニットはロングとは言え確かに短い。

「真冬だつたらカラタイだけど、冬も終わりになつてきるからソックスだな。」

カ

ラタイ=カラータイツ

お洒落には気合が必要、と言わんばかりの組み合わせに正直リンは戸惑つてゐるが、折角選んでくれた服装を拒むわけにもいかない。結局リンは彩女から渡された膝上まである黒色のオーバー=ソックスを素直に穿く。

「いつも落ち着いてるタカスンが珍しくきよどつてゐな。」

落ち着きのないリンをみて佳澄が茶化す。

きよどる

＝拳動不審状態になる

「だ、だつて。」

こんなに足を出したことがないので落ち着ける筈がない。

茶化してきた佳澄はヒョウ柄のキャミソールの上に肩が開いたやつぱり丈の短い黒色のワンピース、そして紫色のオーバー=ソックスを穿いてゐる。

「彩、口テ貸して。」

「いいよ。」

落ち着かないリンをよそに露出に抵抗のない佳澄は髪の毛のセットへと取り掛かる。慣れた手つきで髪の毛を巻き、崩れないように仕上げのスプレーを振りかけてゐる。その傍らで

「ぬ~」

リンが変な声を上げる。今まで化粧したことのないリンはファン

デーションの下地を塗られるだけで変な感覚がしていた。

「ひ、皮膚呼吸が・・・」

「マジ初めて！？」

「今ドキ珍しいべ？」

次はリンの顔にファンデーションを塗る彩女に、すでに化粧をしている顔に手を加えている佳澄が続く。

いや、福岡で通っている高校では見かけなかつたんですけど。休みの日とかは知らないが、前言つたようにとりあえず進学校だつたのであまり見た目が派手な人はいなかつたと思つ。

「じゃあ今日は新しいタカサンのデビューの日だな。」

意気揚々とリンを変身させる彩女は輝いて見えた。数年後にはプロとして、同じように誰かを変身させていくのだろう。彩女の将来のことをふと思つと、リンはまた自分の将来に少し不安を感じずにはいられなかつた。

やつぱり来るの間違つたかも・・・。

ライブハウスに来て一組目のグループが演奏を始めた瞬間にリンはそう感じた。

リンの手入れを終えた後、さつさと自分の準備を追えた彩女と、時間を持て余していた佳澄の一人と一緒に始めてのライブハウスに訪れた。それほど広くないライブハウスに、同じような格好をした女人の人やそれに見合うような格好の男の人人がたくさんいる。人混みが苦手でも、佳澄と彩女と話をしたりして気を紛らわすことによつて何とか持ちこたえることが出来ていた。しかし、演奏が始まるとそうはいかない。演奏が始まると共に盛り上がる佳澄と彩女、そしてその他の観客。以前の合コンの時のようにリンは完全に出遅れていた。

狭い部屋の壁に跳ね返されることでより一層響く楽器の音、正直何と歌つているのか分からぬ歌声、そしてついていけない周りの盛り上がりに思わず倒れそうになる。

そんな時腕をぐいっと引つ張られ、一瞬本気で倒れているのがと
思った。

「リン、ちょっとこいつちこい。」

全部聞き取ることができなかつたが、からうじて聞き取れた声からとりあえず完司だらうといふことはわかつた。そのまま歩き出す完司につられて付いて行くと、完全にステージに目が向かつてた筈の佳澄と彩女も気付いて後から付いてきた。

薄暗い廊下を通り、通された明るい場所は控え室だつた。

「一瞬誰か分からなかつた。」

そう笑いながら話しかけてくる完司も一瞬誰だかわからぬ。

「お互い様だよ。」

そうだよな、と周りからも声が漏れる。顔を上げると、いつもとは違う皆がいた。

黒が基調となつているものの、光るアクセサリー類を身に着け、見るからに“ロック！”という格好に加えセットした髪型、そして化粧をされた顔はほぼ毎日会つても思わず見違えるほどだつた。

「化粧うめえ！それにセットも…」

リンの後をついてきた彩女が思わず大声を上げると、近くにいたグループからキッと睨まれた。

「集中している途中だから、あまり大声出さないようにね。」

睨んできたグループは出番が迫つてきているのか、ピリピリしたムードを漂わせていた。その人たちを刺激しないように優しく説明してくれたユキに対してリン達三人は「はい。」と小さく返事をした。

「化粧やセットは自分らでしたんすか？」

「どうしても気になるようで彩女は質問する。」

「一応はね。足りないとこは俺がフォローしてくる。」

「そつか、美容師ですもんね。」

コウが軽く説明すると、合コンでの紹介を思い出して彩女が敬語で相槌を打つ。

「ライブハウスだと黒髪田立つな。少しふりつき始めてビックリしたぞ。」

どうやら完司はチケットを渡した手前、来ているか気になりハウス内を除いたところみると元気がなくなるリンに気付き控え室へと連れ出したようだつた。

「ありがと。」

感謝の気持ちを述べると、化粧をしてくるのにも関わらず完司の頬が少し赤くなつたのがわかつた。そんな何気ない会話をしながら少し時間を過ごした後、とうとうNEXの出番が近づき雰囲気がピシッと変わり始めた。

「横で見ていけよ。今回だけ特別な。」

ステージに向かいながらリンのことを心配して完司がそつ促す。他に反対するメンバーは誰もいなかつた。

優しい言葉に優しい人達。幸せな筈なのに、リンは少し怖くなつた。ステージの脇から演奏を始めた完司たちを見て思わず泣きそうになつていた。

「マジ感動しました！」

「やつぱすげかつたです！」

出番が終わつた完司達と控え室に戻りながら興奮を抑えられない佳澄と彩女が半ば叫びながら賞賛する。もちろんリンも同じ気分だつた。全員が目立とうとしてまとまりのないまま演奏を終えたグループとは違い、完司達のNEXはバランスの保たれた気持ちのいいグループだつた。勿論曲もしっかりしていて、主張しそぎない演奏と完司の綺麗な歌声がマッチしてまるでプロのコンサートに来たような感覚になつた。

と言つてもリンはプロのコンサートなどに行つたことはないからあくまでもイメージであるが。ただ、他のグループと比べるととても同じ素人とは思えなかつた。

「サンキュー。」

素直に賞賛の言葉を受け止めるメンバーの嬉しそうな顔を、リンは何も言わずただじつと見ていた。

「どうした?」「

興奮が収まらないままの一回が控え室に着いたころ、完司がリンに話しかけた。一同の後ろを黙々と歩いているリンの表情が暗く曇つていて、そこに完司はとっくに気が付いていた。

「元気ないぞ?」

「あ、ちょっと疲れたみたい。」

「本当に・・・」

「「マジでえーーー!?」」

ぎこちない笑顔で答えるリンの顔を見て完司は何か言いかけたが、その声は佳澄と彩女の絶叫によつて遮られた。

「完司、レコード会社の人人が来てる。」

すげえ、とまだでかい声を出している佳澄と彩女の傍、いたつて冷静なユキがまだ控え室の中に入つていない完司に報告する。

「あ、本当?」

完司もいたつて冷静である。しかしさすがにリンはそういうかなかつた。

「すげえじゃん!」

さつきまでの暗い表情とは一変し、リンの表情がパッと明るくなつた。しかも佳澄や彩女の話し方が移つていて完司は普つと笑つてしまつた。

「え? 何?」

完司が何故笑つたのかわからぬリンはキヨトンとした顔で完司を見つめた。さつきまでの暗い顔の面影はなくなつていて完司は少し安心する。

「教えない。」

表情がパッと変わつて面白く感じたというのもあるけど、今までと違う言い方をした新しいリンを見て嬉しく感じて笑つてしまつた

なんて、口が裂けても言えない。

「何？」

「教えない。」

控え室に一人で入りながら行われる他愛のないやり取りにも幸せを感じて完司はまた笑ってしまう。

しかし、続いて欲しかったその幸せは一瞬で終わってしまった。

ユキが報告してくれたレコード会社の人は二人居た。二人共男の人で、三十路になつているかなつていかないかくらいの、割と若い年齢だった。

「上司が前々から目をつけていてね。今日は代理で来たんだ。」

若干前に立つてゐる男の人が話し始めた。その場に居た皆が思つた通り、すげえ話に違ひない。思わず笑顔が込み上げてきそうになる中、若干後ろに立つてゐる男の人は話に入つてくる様子もなく、ただじつと立つてゐる。とりあえず仕事上付いてきた、という雰囲気が丸出しである。

その男の人とリンの眼が合つた瞬間、お互い「あつ。」という顔つきになつた。

「何で・・・・」

またさつきと一変したリンの表情は驚きと悲しさが混じつた、複雑な表情だった。

「音楽関係の方も経営しているんですね。」

リンとは逆にその男の人はさつきまでの退屈そうな顔と一変し、嬉しそうにニヤッと笑つた。何かを含んだようなその笑い方は、思わず嫌な気分になる。

その男の人は下を向いてしまつたリンの、今までとは違つた格好をじろじろ見てまたニヤつと笑つ。

「新しい生活を満喫していよいよだ。何よりだ。」

楽しそうな男の人とつて変わつて、リンは苦しそうな表情になつていく。

「あの？」

「何すか？」

どう見てもおかしくなつた雰囲気の中、佳澄と彩女が口を開いた。だが、男の人は一人をチラツと見るだけで、質問には答えずリンの

方につかつかと歩いていった。リンは顔を上げることも出来ず、また体を動かすことも出来ずにただそこにじっとしていた。

「新しい友達もできたようで。」

リンの少し手前で立ち止まって、上から見下すように呟つ。実際に高い身長の男の人の顔は、ヒール七センチのブーツを履いて下を向いているリンの頭よりも上にあった。

「何の力もないお前には、そうするしか出来ないよな。」

リンが両手でぎゅっと服を握った。その手は心なしか震えているように見える。

「それにしても、変わったお友達だな。」

派手な見た目の顔を明らかに馬鹿にしているのがわかつた。その場に居る誰もがそのことに気付き、不愉快になつた。それはリンも例外ではなかつた。ずっと下を向いていたリンがキッと睨みながら顔を上げ、そして右手を振り上げた。

しかしその右手が男の人の頬に当たることは叶わなかつた。

「安心しろ、ビジネスに影響はない。」

男の人はリンの右手を軽々と左手で制しながら淡々と言つ。ビジネス、つまりNEXとレコード会社との契約のことを指すのだろう。でもその言葉でリンが冷静になれる訳もなかつた。

「離してよつ！」

リンが思いつきり腕を振り下ろして男の人の手から逃れた。何か言い返したいのに、言葉が出てこない。

「・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わずにリンは控え室から飛び出した。後ろから顔の呼ぶ声が聞こえてきたけど、リンは構わずに走り出した。

「一体何・・・・・」

ぽかんとした雷を置いて佳澄と彩女と、そして完同もリンを追つて控え室から飛び出した。

「俺達も行くか。」

少し出遅れて「コウが、同じく置いてきぼりにされている雷とコキ

を促した。

「お、おつ。」

雷はケースに入れたギターを慌てて抱ぎ、先に歩き始めたコウの後ろを付いていく。

「あ、あの」

もう一人のレコード会社の男の人が気まずそうに声を出す。

「お宅とは合いそうにないですね。」

いたつてまだ冷静なユキが冷静にさらりと言い残してメンバーを追つていった。控え室にはレコード会社から来た男の人一人と、最後に出番を控えた一つのバンドグループだけが残った。

「同意見だ。」

リンを追い詰めた男の人はリン達皆が出て行つた後、開きっぱなしのドアを見ながら吐き捨てるように言つた。

ずさあつ

「痛つ。」

ライブハウスから飛び出して間もなく、慣れないヒールで全力疾走していたリンは足がもつれて冷たいアスファルトの上に倒れ込んだ。近くを歩いている人たちの視線がいっせいに集まり、その中からはクスクスと笑い声も聞こえたけれども、今のリンにとつてはどうでもいいことだった。

「タカスン！ 大丈夫か！？」

「じろじろ見てんじゃねえよ！」

後から追いかけてきた佳澄がリンの名前を呼び、彩女が周りに向かつて叫んだ。リンは黙つて上体を起こした。

「リン。」

完司が右手でリンの左腕を持ち、立ち上がらせた。転んだ時の勢いで右手の小指側と、右足の膝上から膝下にかけて血が滲んでいる。

「タカスン！」

その怪我に気付き、佳澄と彩女が同時に叫んだ。

「あ、ごめん服が。」

「馬鹿！ そんなのいって！」

服は破れていないもののアスファルト上の砂や小石が全体に付き、右の靴下は破れてもう穿けない姿となっている。借り物なのに、どこか冷静な部分のあるリンに彩女は半ば怒ったように一喝した。

「大丈夫か？」

「わっ！」

追いついたコウに続き、怪我をしたリンを見て雷が驚きの声を上げる。そしてその後ろにはユキがしっかりと追いついてきている。

「雷。」

「おおっ、いいぜ。」

必死に冷静さを保とうとしている完司の言いたいことにすぐに気が付き、雷は返事をする。そのやつとりはさすがメンバーといつよりも、それを超えてすごいと言える気がした。

そんな二人のやつとりを要約すると、ここから歩いていける雷の家までいき、そこで怪我の治療をしようということであった。雷の家はさつきまでみんなで居たライブハウスから近いとは言いがたいが、歩いて帰れる距離にある。

「歩けるか？」

完司の問いに今のリンはただ頷くことしか出来ない。

でも、嘘ではなかつた。

不思議と、血が滲んでいる怪我の痛みはほとんど感じないので、完司に握られている左腕の方が何故かずっと痛い。

雷の家に向かう間、完司はリンの手を握つたままだつた。怪我をした右手を握るわけにもいかず、リンの左手を完司はしっかりと右手で握つていた。引っ張るような形でリンの二歩程手前を無言で歩いていく完司の背中は、格好のせいもあると思つが全然知らない人に見える。

そして同じように、リンも無言だった。

「後どれくらい？」

「十分ぐらいかな。」

ふと感じた疑問を口に出した彩女の問いに、雷が答える。大きな声では喋らないが、住宅街に突入した路地の冷え切った空気の中では会話が響く。

完司とリン以外の一人は喋りっぱなしと言つわけでもないが、ずっと無言という状態でもなかつた。しかし、一番後ろにいる完司とリンにだけは誰も話しかけることは出来ない。

「あれっ？ 何あの花束。」

さつきの彩女の問いから五分くらい経つた頃、だらうか、今度は佳澄が質問をした。すぐ横に公園がある道路の、特に珍しくない場所で生まれた質問だつた。その公園の入り口と道路を挟んだ場所にある電柱の元に、置かれたばかりと思われる花束が確かにある。

「ああ、一・二ヶ月前になるかな。そこで事故があつたんだ。」

また雷が答える。その会話は完司とリンにもしっかりと聞こえていた。聞こえていたからこそ気付いてしまつた。

ここに

リンはゆっくり歩きながら周りを見回した。広い公園にたつた数個しかない電灯はあまり意味を成し遂げておらず、ほとんど真っ暗な状態だつた。その前にある割と狭い道路に電柱。右側には住宅が並んでいる。

知つている場所に間違ひなかつた。

怪我した足でゆっくりと歩き続けていたリンの足が止まつてしまつた。それにつられてしつかりと手を握つていた完司も立ち止まり後ろを振り返る。でも、名前を呼ぶこともなく相変わらず無言のままだつた。

「あの事故つて若い男の子が一人意識不明になつたよな？ 花束が置

いてあるつていうことは亡くなつたのかな。」

「ウが初めて知つた、という感じで少し悲しそうに言つた。誰だつて花束が置いてあればそう思つだろう。場の空氣が一瞬重くなり、皆何を言つたらいいのかわからなくなつた。

そんな沈黙を破つたのは、ずっと黙り込んでいたリンだつた。

「死んでないよ。」

泣き声のような声だつた。皆が振り返つた視線の先に居たリンの目に實際に涙が浮かんでゐる。そんなリンの視線は誰にも向いておらず、例の花束に釘付けとなつてゐる。

「死んでないよ。だつて

その先は言葉にならなかつた。堪えきれない涙が次から次へと溢れ、リンの頬を通り過ぎてアスファルトへと落ちていく。

だつて何の連絡もないんだもの。

リンは思わず立つていられなくなつてその場にしゃがみこんだ。どんなにみつともないと思われても我慢することができなかつた。

「新あつ。」

顔が涙と鼻水と、そして落ちた化粧でぐちゃぐちゃになる。でもそんなの気になる訳がなかつた。

そんなリンをずっと見つめていた完司の右手から力がみるみる無くなり、リンの左手はとうとう離れてしまつた。離れたリンの左手が冷たいアスファルトの上へ落ちていく様子はスローモーションがかかつたようにゆつくつと見えた。

リンはしゃがみこんだまま、その場に居た誰もが聞いたことのない名前を何度も呼びながら泣き続けた。誰も話しかけることなど出来やしなかつた。

9・もう少し

目を覚ますと、まず見たことのない天井が視界に入った。

「暑い。」

知らない部屋にいる驚きよりも、まずそれが最初に湧き出た感情だった。やっぱり知らないベッドの上で佳澄と彩女と思われる女子一人に挟まれて寝ていたリンは、そっと体を起こした。

「痛い。」

包帯の巻かれた右手に氣付くと、擦りむいた箇所が急にヒリヒリと痛くなつた気がしたが、それよりも頭の方がずっと痛く、そして重く感じた。

「ああ、そつか。泣いたんだっけ。」

頭痛の原因を考えると、雷の家に向かつている途中で小さい子みたいにボロボロ泣いたことを思い出した。あんなに泣いたのは、一体どれくらいぶりのことだつたであろうか。

女子一人に挟まれたままボーッとしていると、部屋のドアがコンコン、と一回ノックされて開いた。

「あ、起きてたか。」

セツトされていない髪型に化粧をしていない雷の顔を見ると、昨日のことは夢だったんじゃないかと一瞬思つた。

きっと、そう思ひたかったのだ。

「あの、隣にいるのは佳澄と彩女でいいんだよね？」

朝の挨拶なんてすつ飛ばしてリンはまずそれを確認した。化粧を落としてスッピンになつていた佳澄と彩女の顔を初めて見たリンは自信を持てなかつたのだ。

「お前、さすがにそれは失礼だろ。」

肯定も否定もせず、ただ雷からは飽きたような反応だけが返つてきた。

「んー・・・タカスン！」

「タカスン！？」

そんな二人のやり取りのおかげで田代が覚めた彩女が寝ぼけ眼でリンの姿を確認すると、驚いたように飛び起きた。それに続いて佳澄も飛び起きた。眉のほとんどない顔で一人がリンを凝視する。

「お、おはよう。」

沈黙に耐えられなくなつたリンはやつとと言つべきか、とりあえず朝の挨拶をした。

「大丈夫か？」

雷がリンに声を掛ける。怪我のことを指しているのか、昨日の事を指しているのか、それとも両方のことなのかはわからないが、心配してくれていることだけは理解できる。

でも何と返事すればいいかはわからない。リンは思わず黙り込む。

「タカスン、まだ私らには話せねえか？」

次の沈黙を破つたのは佳澄だつた。以前「言いたくないことは言わなくていい」と言つてくれたその日から一度も核心に触れるような話をしてくれることはなかつた。そして彩女もそうだつた。だけどそれは、興味が無い訳では決してなかつた。

そんな二人の思いやりにリンも気付いていた。

「もう少し・・・」

色々な思いが交錯しながら、やつとのことで絞り出した声は小さかつたが、部屋に居た三人には聞き取ることがちゃんとできる大きさだつた。

「もう少し待つて。」

今すぐには話せない。まだ少し混乱しているからと云つともあつたけど、最初は完司に話さなければ、と思つた。何故かはわからないけど、そう思つた。

「はあ。」

田代田といつひとで普段よりも利用者が多い図書館の中で本を棚

に並べていた完司は大きく溜め息をついた。

『新』

泣きながらリンが呼び続けた名前と、そのリンの姿が頭から離れてくれない。

「どう考へても好きなヤツだよな・・・」

無意識に声が出ていた。リンがこぼした涙の意味を聞きたいけど、聞くのが怖い。知りたいけど、知りたくない。そんなことをずっと考えている今田の完司は、誰が見ても明らかに全然集中力が無い。

「完司君。腕、どうしたの？」

「わあっ！」

いつもの「」とく、背後から突然聞こえてきた浦田さんの声に体が跳ね上がった。

「浦田さん、イキナリ話しかけないで下せこよ。」

「ボーッとしてたから驚くんだよ。」

いつものように「」しながら的を射たことを言つ。「で、腕どうしたの？」

浦田さんは先程の質問を繰り返した。

「ああ、ちょっと筋肉痛で。でも仕事には影響ないですよ。」

そう言いながら棚の上の方に本を置く完司の動きはぎこちない。昨晚リンはしばらく泣きじやくつた後、少しずつ声が小さくなり最後には静かになつた。ピクリとも動かない姿に少し慌てたが、眠つてしまつたことがわかると完司はすぐさまリンを持ち上げた。膝で顔を隠すようにしゃがみこんでいたリンをお姫様抱っこで抱え、それまでとは逆に皆の先頭に立つて歩き出した。誰も止めることはなく、黙つて完司の背中を追つていく。

決して長い距離ではなかつたし、リンも軽い方だが、抱えて歩くとなるとさすがに男でも大変だ。腰や足など全身に疲れはきているものの、腕が断トツである。

「今日はずっとカウンターに居なさい。椅子に座つてもいいかも」

ぎこちないながらも本を並べていた完司をじつと見ながら浦田さんがそう支持した。カウンターではいつも立ちっぱなしで、確かに

今日の完司には辛いかもしれない。だから気を紛らわさうと浦田さんにカウンターを任せて本を棚に並べていたのだが。

「いや、駄目ですよ。筋肉痛で仕事を口クにこなせないなんてそんなの。」

「いいから座りなさい。」

バンドのせいで仕事に影響を与えるわけにはいかない。これはバンドを始めた時から自分で決めていたことだつた。座つても仕事はできるが、いつもと違うとそれはやっぱり影響を与えてくることになる。

だからせっかくの心遣いも断ろうとしたが、その気持ちは浦田さんによつてあつさつと切り捨てられた。

「ね？」

笑顔で言つものの、じつは時の浦田さんほ少し怖いものを感じる。リンが前にお笑いライブのチケットを貰つた時のこと、断ることができない圧迫感を感じるのだ。

「はい。」

好意を素直に受け取ることにし、返事すると重要なことに気がついた。

「浦田さんがここにこるつてことは今カウンターは・・・」
誰も居る訳がなかつた。

「浦田さん！」

浦田さんに軽く怒鳴つた後、全身筋肉痛の体で小走りにその場を離れてカウンターに向かつた。すると案の定、何人か本を借りようとカウンターの前で待機していた。「やつと来た。」という反応をする人達に完司は謝りながら仕事をこなし始めた。

今の完司には忙しくらいで丁度良かつた。

「リンちゃん今日来なかつたね。」

「ぶつ！」

カウンターで一日を終えた閉館後、浦田さんがつぶやいた一言に完司は過剰に反応し飲んでいたコーヒーを口から勢いよく噴出してしまった。

「あーあ、ブルマンなのに。」

そう言いながら浦田さんがティッシュを差し出してくれる。

「リ、リンだつて忙しくて来れない時くらいあるつすよ。」

完司は差し出してくれたティッシュで口元を拭きながら自分に言い聞かせるようにポツリと言つた。今日ずっとカウンターの所にいながら結局リンを探していた自分に気付いていたからだ。リンと同じ世代や似た背格好の人が視界の隅に入るはどうしても視線がその方向に向かっていた。浦田さんもそれに気付いていたのだろう。

「体調を崩してないか心配だなあ。完司君、明日は休みだしリンちゃんが元気かどうか確認しといてね。」

確かに明日は月曜で、図書館の定休日。今のところ何の予定もない。

「あ、ハイ。」

さりげなく連絡を取るように促されたことに気付いた。リンに何か連絡しなければ、と思いつつ何て切り出せばいいのか思い浮かばずに困っていたけど、浦田さんが用件を作ってくれたことで格段に取りやすくなつた。さすが浦田さん。

「叶わないな、浦田さんには。」

きっと何かあつたことにも気付いているのだろう。だけど追求せずにそつと背中を押してくれる。そんな浦田さんはすごい大人だと思つ。もつとも仕事をよくサボるのはいけないと思うが、それでも憎めない雰囲気を持つていて浦田さんは完司の憧れだ。

ブルルルルル

浦田さんが差し出してくれたティッシュを「ミニ箱に捨てた瞬間に、

机の上に置いてあるバイブ設定の完司の携帯電話が鳴った。

「はい。」

リンかと思い、画面で発信者の確認をすることなく慌てて着信ボタンを押す。だが、電話の向こうから聞こえてきた声はずつと前から聞き慣れている声だった。

「俺。仕事終わった？ 今大丈夫か？」

「何だ、ユキか。」

つい落胆してしまい、ため息をつきながら氣の抜けた声を出した。

「何だとは何だ。失礼なヤツだな。」

もつともな意見である。

「「めん」「めん。で、どうしたんだ？」

とりあえず謝り用件を聞くと、

「今俺がバイトしてる近くにあるコンビニまで来てもらひやるか？」
そう簡潔に言つてertzと電話が切れた。まだ行くなんて返事していらないのに・・・。

「すんません。今呼び出しぐらつたんで、もつ帰ります。」

完司は浦田さんにそう言いながら帰る準備をせつせと始める。と、言つても上着を羽織るくらいだが。

それにして何の用だろう？なかなか電話がつながらないユキから連絡なんて珍しいな。

そんなことを思いながら、寒さの和らいだ夜道に出た。昨晩と同じくらいの気温で、思わずリンの姿がフラツシユバツクする。

ふうー

気を取り直すかのよひに目を閉じて深い息を吐き出すと、真冬のようになり、白い息は生まれず静寂だけが完司を取り巻いた。

「とりあえず、行くか。」

誰に話し掛けるでもなく、目を開け、完司はユキから言われた場所へと歩き出した。

はあー

すっかり暗くなってしまった閉館直前の時間、いつものようにシンプルな格好のリンは図書館の前で深く深呼吸した。昨日の今日、どんな顔で完司に会えればいいのかわからない。でも、逃げたくない。そう思つて雷の家から帰つた後、入浴と食事を済ませると休むことなく図書館へと向かつてきた。当たつて碎ける精神でとりあえず会うんだ、という気持ちでラジオ体操の時よりも深く深呼吸して気持ちを落ち着けた。

何に当たつて碎けるかはよくわからないけど、それくらいの勢いが今必要なのだ。

よし、入ろう。

決心してドアノブに手をかけようとした瞬間、突然後ろから強い力で引っ張られた。

「！？」

リンは予期せぬ出来事に声が出ず、代わりに心臓は図書館の中にまで聞こえるのではないかというくらいバクバクと早く鳴つた。

「お前、昨日も完司の周りチョロチョロしてたる？」

「もしかして彼女ぁ？」

さつきまでの進行方向とは逆の向きに振り返ると、声が聞こえると同時に強烈な二人組みが視界に入った。初めて図書館に来た時、入れ違いで帰つていつた完司のファンと思われる人と、その友達だ。

「へつ？まさか。

まだ半分動搖したまま、とりあえず変な誤解が生まれない内に事實を伝えたが、最初からリンの意見を聞き入れる様子はない様だつ

た。

「ちょっと来いよ。」

「えっ？あの。」

動搖の残るリンに構うことなくツカツカと歩き出す完同のファン。そして、そのまま引きずられるように歩くリンの後ろを友達が無言で付いてくる。どうみても変な光景だが夜ご飯時、ほぼ住宅街の中にあるこの場所で人とすれ違うこともなく、リン達三人は図書館からどんどん離れていった。

「で？お前何なの？」

リンが連れて行かれた場所は図書館から歩いて十分もかかるない工事現場だった。仕事が終わつた時間帯で人気もなく、もちろんほとんど真っ暗である。しまつた、何でノコノコ付いてきてしまったんだろう？と思つても時既に遅し。

「黙つてねえで何とか言えよ！」

閑静な場所で怒鳴り声が少し響いたが、前の道路を通り過ぎていく車の騒音にすぐに搔き消された。

「何つて・・・」

ただの友達、と言おうとしたけどその言葉はリンを睨みつける一人への耳へ届くことなく、リンの喉の奥へと呑み込まれた。

友達？年が少し離れているから変かな。友達と言つよりお兄ちゃんつて感じがするし。現にお兄ちゃんと同じ年だからそういうのもう無理ないけど、そんな説明で一人が納得する気がしない。

それに、ただの友達じゃない氣する。

「なあ？」 ガアンッ ジヤラジャラジャラ・・・・・

イライラがどんどん募つていく完同ファンが傍に置いてあつた工具箱を蹴り飛ばした。中からは多様のサイズの釘が数え切れないので飛び出し、地面を釘色へと覆いつくした。

「ちょっとちよつと、大事な道具を粗末にしないでくれる?」

結局リンが返事をしないまま困つていると、聞き覚えのある声が完司ファンの向い側から聞こえてきた。

「ユキ?」

「ユキいつ? マジ?」

リンが見覚えのある空色の頭を確認すると、しばらく黙つていた完司ファンの友達が耳に響くよつと高い大きな声を発した。どうやらこの人はユキのファンらしい。そう言えば前すれ違つた時完司のことは微妙、みたいに言つていた。

「なんでユキがこんなとこにいんの?」

リンが言おうと思つた台詞を完司ファンに取られた。まあ。聞きたいことは一緒だから別にいいんだけど。

「ここの俺のバイト先。で、忘れ物取りに戻つて来たつて訳。」
なるほど、そうですか。こうこうピンチの時というか絡まるている時に誰か現れるのつてドラマとか漫画の世界だけと思っていたけど、実際にあるもんだなあとか平和なことを思つているとユキが寄つてきてリンの頭の上にポンと手を置いた。

「こいつ俺らの妹みたいなもんなんだよ。だからいじめんな。」

優しい口調でリンをかばってくれるもの、睨みつけているのか怒つているような雰囲気がユキから感じられた。もつともユキの手に頭を押さえられ上を向けないリンは確認することが出来ないので、あくまでも憶測に過ぎない。

「でも」

「釘、直しつけよ。」

まだ何かを言いたげな完司ファンの言葉を遮り、ユキはリンの頭に手を置いたままスタート歩き出し、リンはまた引きずられるようにユキの後ろを付いていく形になつた。今日はこんなのはつかだな。

工事現場から歩いてすぐのところにあるコンビニに着くと、ユキはリンに何も言わず完司に電話し始めた。電話越しに聞こえる完司

の声に思わず昨日のことを思い出してリンは体が固まつた。決心していた筈なのに、思わぬトラブルがあつて無理やり作り上げていた決心が少し薄くなつてしまつていた。

でも、逃げようとは思わなかつた。

「完司来るつて。ここにいたらさつきみたいに絡まれないだろ。じやあな。」

そういうつてまたもやスタスター歩き出すコキを慌ててリンは引き止めた。

「も、もう帰ると？」

「お。方言。俺が居たつて邪魔だろ？」

無意識にリンの口から出た方言に反応しながらもコキあつさつと質問に答えた。

「大丈夫。完司なら受け止めてくれるよ。」

コキの袖を掴んだリンの手を優しく離しながら、穏やかに言った。“受け止めてくれる”それが何を意味しているかはよくわからないけど、確かにそんな気がした。

「がんばれ、リン。」

そう言つてまたリンの頭の上に手を置いて、やさしく撫でた。大きい手の暖かさに涙腺が緩みそうになつてリンは顔を上げられなくなつた。それを見越してか、コキはリンの顔を上げることなく「じやあな。」と言つてすっかり暗くなつた夜道にあつと/orに消えていった。

完司がそのコンビニに到着したのはそれから十分と経つていなかつたと思う。

「リン！？コキは・・・」

電話を掛けてきたのはコキの筈なのに、呼ばれた場所にリンが居ることに完司は最初驚いた様だつたが、すぐに冷静になつていつものように話しかけてきた。大体の流れを把握したらしい。

「動いて平氣か？」

優しい言葉にただリンは頭を「クン」と下げるだけだつた。

「・・・・・」

「・・・・・」

お互に無言になってしまった。最初、どう切り出せばいいのかわからない。

「腹減った。肉まんでも喰わねえ？」

おなかが減ったのは事実だろうが、とりあえずこの雰囲気をどうにかしようと完司が切り出した。

「喰う。」

元気のない声でリンがボソッとつぶやくと完司がイキナリ笑い始めた。

「な、何？」

思わず笑いにリンは困惑する。だつて笑えるような何かが今二人の間に起こった覚えがないのだ。

「『めん。でもさ。すごい』テンションが低いのに、いきなり男言葉で、しかも『喰う』って。普段のお前からは想像してなかつたからさ、ビックリして思わず。」

そう、新しい名前をリンの口から聞く直前にライブハウスでリンが「すげえじやん！」と言つた時の様に面白さと、違う言い方を聞けた嬉しさで完司は笑つてしまつていた。

そんないつものような屈託のない完司の笑顔にリンの体を支配していた変な力が抜けた。

「だつて最近食べてないからさ。つていつまで笑つてんの！」

大笑いとまではいかないが、まだ声を上げて笑う完司に思わずムキになつてしまつ。いつも通りだ。ユキが言つたように“大丈夫”。リンはその言葉を頭の中で繰り返した。

まだ少し肌寒さが残る空氣の中、昨日雷の家に行く時に通つた公園とは違つ公園の階段にリンは完司と並んで腰掛け、久々の肉まんを頬張る。

「美味しい。」

素直な感想だつた。お互にどう切り出せばいいのかわからず、二人は黙々と肉まんを口へと運んでいく。

「昨日、『じめんね?』

肉まんを食べ終えた後、完司が一緒に買つてくれた温かいお茶のペットボトルを軽く握り締めてリンはポツリと言つた。

「取り乱しちやつて。」

付け加えるように、やはりポツリと言つた。完司は自分のお茶をゴクリと一口だけ飲んでふうっと息を吐き出した。

「『新』って」

その名前を出した瞬間リンの肩が軽くビクつと動いたのがわかつた。完司はそれに気付いて言葉が止まつてしまつたが、聞かない訳にはいかない。覚悟を決めてもう一度気になつっていた名前を口に出した。

「『新』って彼氏か?」

若干早口になりながら、一気に言つた。リンの視線の先にあるペットボトルを握る手にぎゅっと力が入る。

「うん。」

完司の質問から少し時間が経つてからリンが頷いた。

「福岡の?」

「うん。」

「今も福岡に居るのか?」

いつかの日のような会話。リンに初めて兄弟の事を聞いた日だ。だけど、あの日のようにリンの返事はすぐに返つてこない。

「東京に居る……と思つ。」

自信なさげに、ずっと下を向いたまま、リンの姿はいつも以上に小さく見える。

「“思う”つて？」

完司はおそるおそる聞いた。顔を曇らせたリンにどこまで聞いていいのかわからないからだ。もしかしたら、昨日のようにまた取り乱してしまうのではないかと不安になってしまった。

「連絡がないから。」

短い返事からは全てを理解することは出来ない。なので、連絡がない？いきなり音信普通になった？そしてその新を探す為に東京に来たのか？家族の元を離れて、一人で？高校生の女の子が？なんて考えが完司の頭の中をよぎつている。

「まだ、目が覚めていないのかもしれない。」

完司が考えたシナリオはどうも違う話の様だ。そうだ、勝手に考えないで、リンから聞くことが事実なのだ。

雑念を払つて、完司は体をリンの方に向けた。リンの視線は相変わらずペットボトルに向けられている。その体勢のまま完司はリンが話すことを、一言一句逃さぬ様にじつと聞いた。

リンが話してくれた内容は、完司が思つていたよりもずっと過酷なものだった。

「東京？」

「そ、姉貴がさ、リンと来れるなら来てつてさ。」

福岡県のある学校の図書室の隅で、本を読まずにリンは話をしていた。その相手はもちろん、新。周りと馴染めずにお互い一人で来ていた学校の図書室で知り合い、いつからか付き合つようになつた。付き合い始めてからもう一年半くらいになるだろ？新のお姉さんである亜貴とも仲良くなつていた。

「向こうでの生活も落ち着いてきたし、今ツリーとかイルミネーションが綺麗だからどう？つて。ホテルも系列のところだからタダで

よし。どうだ?」

亜貴はこの秋に結婚して東京へと行ってしまった。新の家はホテルやレストランなどを経営している家で、亜貴は現在東京のホテルを管理している。

「行きたいな。貯金下ろせば飛行機代なんとかなりそうやし。でも、本当にタダで泊めてもらつていいと?」

宿泊代がいらないということは、バイトもしていない高校生にとってはかなり大きい。でも、話を聞いて調べた限りでは結構豪華なホテル。そんな料金がかかりそうな部屋にタダで泊めてもらつのは少し気が引けてしまう。

「いいつて。こんな時くらいは家を利用してやれば。」

新が冷めた様な目で、投げ捨てるよつに言つた。新はある事情から、亜貴を除いて家のことを嫌つてゐる。

「来年の今頃は受験勉強で忙しいだろうし。」

現に三年生と思われる人達が一心不乱に図書室の机で勉強をしている。一年生になった時から進路の話は度々出ていたが、希望進路のないリンにとつては不愉快な光景でしたなかつた。それに、雰囲気がピリピリしており、陰の空気が漂つていて近寄れない。

「うん。」

リンは進路の不安を口にする「ことなく、とつあえず頷く。

「じゃ、早速計画立てよつか。外に出ようぜ。」

リンはクラスの違う新と放課後こうして図書室に集まり、日が暮れるまで一緒に本を読んだり喋つたりすることが毎日の日課である。元々インドア派の二人が外でデートすることはあまり多くないが、こんな時は別だ。勉強に励む三年生の横で楽しく旅行の話なんて出来る筈がない。

「うん。どこに行く?」

普段クールなリンの顔に常に笑顔が滲み出でている。それだけ、新への思いが強いのだろう。『旅行』という刺激的な出来事があるから尚更だ。修学旅行が北海道である高校に通つてゐるリンにとって

は初めての東京となる。東京ではないが、あの有名な遊園地にだって行きたい。

考えるだけで、楽しくなつてくれる。

実際に楽しい旅行の筈だった。

細かく書つと途中までは楽しかつたんだ。

「明日福岡に帰っちゃうのね。寂しいなあ。」

「何言つてるんですかあ。素敵な旦那さんが居るじゃないですか。」

あつという間に訪れた東京での最後の夜、亜貴と新の三人で宿泊するホテルのレストランで夜景を見ながら食事をしていた。こんなに素敵な場所、社会人になつてある程度お金稼いでからじゃないと来られないと思つていたのに。付き合つている新の家がたまたま経営しているからと言つて来られるなんて、すこく贅沢で幸せだ。

「リンちゃん。新のこと、これからもよろしくね。」

亜貴から毎回と言つほど、会つ度に言われている言葉にリンは笑顔で頷く。そしてその度に新が恥ずかしそうにしている。

「全く、姉貴つてばこいつまでたつても小さい子ども扱いだし。」

食事を終え亜貴と別れた後、部屋へと向かうエレベーターの中での新がぶつぶつと文句を言つている。これもいつもの光景である。

「仕方ないつて。亜貴さんにとってたら永遠に弟つちやもん。」

そしてリンのこの台詞も、もはや決まり文句である。

「そりだけどや。」

そんな他愛ない会話をしていると、部屋に着いた。

「すじい。綺麗！」

部屋のドアを開けると、窓から東京の夜景がすぐに目に入つてき

た。昨日は有名な遊園地の近くにあるホテルに泊まつた為、この部屋に泊まるのは今日が初めて。こんな素敵な部屋にタダで泊めてもらえるなんて、本当に贅沢で幸せだ。

「新、ありがとう。」

「いや、このホテルに泊まるのは俺の力じゃないから。」

夜景に感動したリンの心からのお礼に、新が淡々と言つた。確かに新の言うことは正しいのだが、何ともムードのない台詞である。でも、そんな飾らない新がリンは好きなのだ。

「新と出会つてから、世界が変わつた。」

リンは夜景に見とれたまま、話を続けた。

その話は嘘でも大げさでもなかつた。中学時代、友達関係がこじれでから周りとつるまなくなつた。その心の寂しさを埋めてくれるのが本だつたので、高校に入つてからもほとんど毎日図書室に通つていた。そんな時、同じく周りに馴染めない新と出会つて一人じやなくなつた。

「俺だつて。」

いつの間にかリンのすぐ後ろに来ていた新に、後ろから抱きしめられた。新の暖かい体温と、心臓の音が伝わつてくる。

付き合い始めてから一人じやなくなつたのはリンだけじゃない。俺だつてお前と付き合い始めて一人じやなくなつたんだ。そう言葉には出すのは恥ずかしいから、新はその分リンをぎゅっと強く抱きしめる。

「これからも一緒にあつてね。」

おつてね＝居てね

涙声にハツとして、リンの顔を覗き込むと目に涙が浮かんでいることに気がついた。

『ずっと一人やつたけん、この幸せを失うのが怖いと。』

新はいつの日か、リンが言つていたのを思い出した。その時も「俺だつて」つて思った。

「こつちの台詞だよ。」

いつもだつたらかつこ悪くて言えないけど、旅行という開放感とこの夜景を前にしたらすんなり言えた。それに感動したのか、リンの目から涙がポロリとこぼれた。その後の笑顔を見ると新はキスをせずにはいられなくなつた。

好きだよ。

二人共不器用で口下手だから言わないけど、その想いを確かめ合うように一人は長い夜を過ごした。そのまま一人で夜に溶けてしまうかのように、何度もお互いの体温を感じ合つた。

どうかこの幸せが永遠に続きますよ」と、強くそう祈つた。

12・絶望の始まり

「体、平氣か?」

「お匂いはこれをどこで食べよう、とこつ話になつた時に新が何の脈絡もなく聞いてきた。

今年は例年を下回る寒い年で、今日も例外ではなく何と雪まで積もつてゐる。滑らなこつよにこつもよつゆつくり歩くリンの動きは、確かにぎこちない。

「何か、ちょっと辛い。」

「何でそんなこと言つとよー!」

最高気温が一桁なのに、リンは顔が真っ赤になるのが自分でもわかつた。昨日新と長い夜を過ごして確かに体は少し重く感じるし、寒いからか痛い氣もする。幸せな時間だつたのだけれど、その夜のことをイキナリ思い出すと恥ずかしくてたまらない。

「いや、だつて・・・。」「めん。」

新は何か言いかけた言葉を呑み込んで謝つた。

「あ、こつちこそごめん。」

リンも慌ててすぐに謝つた。心配してくれているのだ、責めてはいけない。

「行こつか。」

リンは新の手をぎゅっと握りしめて歩き出した。まだどこで匂い飯を食べるか決めていないが、すぐに見付かるだらう。そんな気楽なことを思いながら。

それが最後に感じた新の温もりだった。

「わ、わつさより積もつとるー。」

昼ご飯を食べた後、リンと新は少し距離のある駅へと歩き出す。結局何を食べるか決まらなかつたので、コンビニに立ち寄りグルメ本を見て決定したうどん屋さんで昼ご飯を食べた。駅から少し離れているのでそんなに混雑していないだろうという一人らしい理由と、写真に載っていた海老天が美味しそうだつたからという理由で決めた。

そのうどん屋さんに向かい始めた時から突然強く降りだした雪は、朝積もつていた雪をさらに白く変化させていた。

「お帰りませやうのかあ。」

リンはもつ帰らなければいけない寂しさを口にしながら、白い一面に一生懸命自分の足跡を付けて新より前を歩いていく。福岡ではそんなに雪が積もることはない。だから、雪が積もるといつやつて歩きたくなる。そんなリンを後ろから見ながら、新は愛おしさからフツと微笑む。

「あ、公園。

滑らないように慎重に歩いていると、左側前方に公園が見えてきた。電灯やベンチが数個だけある、質素な公園。人が一人もおらず、足跡のない綺麗な雪の白さがまぶしく際立っている。

「んつ？」

公園を見ながら少しボーとしていたリンを、後ろを歩いていた新が呼んだ。

俺、決めたことがあるんだ。

新がこわばつた顔をしている。こういう時の新は寒いからではなく、家のことを考えているのだと知っていた。だからリンも思わず緊張してしまつ。

•
•
•
フ
•
•
•
•
•
。

何かを言いたいのに、上手く言葉がまとまらない。新のそんな様子を向かい合いながらリンはじつと見ていた。一人の吐いた息は積もっている雪のように白く、空へと上りながら消えていく。

「新、今、無理にまとめんでいいとよ？帰りの飛行機の中でも、福岡に帰つてからでも。気持ちの整理が着くまで、私ずっと待つとるけん。」

自分の足元を見ながら固まっていた新をまっすぐと見つめながら
リンが言った。まだこわばつたままの顔で新が顔を上げる。新の不
安を和らげることが出来るように、リンは頑張つて笑顔を作つた。

行云

リンは笑顔を作ったまま右手を新に向かって差し出した。手袋を持つてきていな手は雪のおかげもありとても冷たかったけど、でも何とか新を温めてあげたかった。前にリンが落ち込んだ時、こうやって新が手を差し伸ばしてくれたことがあった。あの手の温もりにどれだけ安堵して落ち着いたことだらう。そのお返しとして、リンも同じように新を救いたかった。

۱۰۰

新の顔がさつきと一変して柔らかくなつた。その表情にリンはほつとする。新がリンの差し出した手に、自分の手を差し出して手を握りうとした瞬間

どんづ キキイツ
ドサ ギュルルルルルルルツ
ガンツ

• • • •

一瞬目の前が暗くなつた反面、頭の中は真っ白になつた。

さりきまで回りに誰も居なかつた筈なのに、どこからか叫び声が聞こえてきた。それに反応するかのように、ロンはゆうべつと目を開いた。

ボタツ

目を開き終わると、生暖かい何かがリンの顔に降ってきた。左のこめかみ辺りに降ってきたそれは涙のように頬をつたって下へと落

ちていく。そして次々に上から降つてきて下へと落ちていくそれが新の血だと気付いたのは、こめかみ辺りをぬぐつた左手にべつたりついた赤色をしばらく眺めてからだった。

「あら・・た？」

自分の上にのっているのが新だといつて気付いたのもほぼ同時だった。

一体何が起こったの？

気が付いたら周りには人だかりができていた。「大丈夫？」と近づいて声を掛けてくれる人もいたけど、リンは反応が出来ない。何が起きたのか、必死で考えた。だけど、思い出せない。どんなに考えても、思い出せるのは新がホツとした顔で手をリンの方に差し出してきた瞬間だけだ。

それなのに今の状況は何？

リンを覆つたまま、ピクリとも動かない新。それだけは理解できたりんの頭の中に『死』という最悪の言葉が浮かんだ。

やっぱり神様なんていないんだ

残酷な赤色で染まつた左手をまだじつと見ながらそう思つた。昔、辛いことがあつた時にそう思つたことがあつた。だけど、新と会つて、一人じやくなつて、神様は居るかもしれないって思つた。思わないとバチが当たるつて。なのに・・・。

フィルターがかかっているようで、ちゃんと目の前が見えない。耳を塞がれたかのように、ちゃんと音を拾えない。

しばらくして、人だかりの誰かが呼んだのである。救急車が到着したが、それで救われると思えなかつた。赤いライトが周りを照らし、サイレンの音がしばらく鳴つていたけど、茫然としていることしか出来ないリンにとつては違う世界で起こつてていることの様に思えた。救急隊の人が担架を持って近づいてくる様子も、ただドラマを観てているかのように今自分の目の前で起こつていることだとは認識できない。

「リ・・・ン・・・・・」

微かに暖かい息が額にかかり、リンは正氣に戻つた。

「あら・・た。」

気持ちに体が追いついていないかのように、小さい声しか出なかつた。でも、それでも精一杯出した声だつた。

「待つて・・・ろ・・・・」

苦しそうに、声を絞り出すようにして新が言つた。それと同時に、救急隊の人が新を担架に運ぶ為にリンから引き剥がした。自分を覆つていた新が居なくなつて、一瞬で軽くなつた筈なのにリンの体はそこから動かない。

「動けますか？」

救急隊の人がリンに優しく尋ねてきた。しかし、リンはその人でなく担架の上に横たわっている新の顔をじっと見た。目も口も閉じられているが、確かにさつき「待つてろ」と言つた。

神様なんか信じない。

だけど、新が言つたことは信じるよ。待つてるよ。だから、どうか死なないで。

待つから。

ぐらりと世界が歪んだと思つたら、リンはそのまま意識を失つた。

昨日の夜とは違う、暗闇の中に落ちていく。

救急隊の人気がとつさに肩に手を回して支えたが、その感触をリンが感じることはなかつた。自分の下に敷き詰まつている雪の冷たさを感じることもない。

ただ、絶望という暗闇の中に落ちていく。その感覚だけを感じることが出来た。

「田を覚ましたら、お姉ちゃんが泣いてた。」

ビックリした、とリンは続けた。お姉ちゃんとは仲がいいし、逆の立場だったら自分も泣くんだろうけど、自分を想つて泣いてくれる存在を目の前にするとすぐ心に響いた。その時は新がどうなっているかわかつていなかつたけど、一人じゃないんだつて感じると視界が少し滲んだのを覚えている。

だけど、泣く気力はなかつた。

「リンのお姉さんは、リンのこと本当に大事なんだな。福岡から東京にすつ飛んできたんだろ？」

今の御時世、福岡から東京に来る手段なんていくらでもある。でも、決して短時間とはいえない時間を掛けて飛んでくるなんて愛がなきや出来ることではない。家族と折り合いの悪い完璧には羨ましく思えた。

「お父さんは長期出張が多いし、お母さんも私が中学生の頃から仕事を再開してバリバリ働いてて、お兄ちゃんとお姉ちゃんが保護者代わりなの。」

家族の話になると、リンの雰囲気が少し和らぐ気がする。リンの雰囲気は張り詰めていることが多いけど、必死に何かを抑えているよう見えたのは今まで一度や一度じゃない。

「『新』は？」

本当は聞きたくなかった。和らいだリンをまた暗い表情に戻したくはないし、何より好きな女の子の口から他の男の話なんて聞きたくない。

でも、聞かなければリンはきっと何かを抑えたまだ。

「植物人間状態。今も、目を覚ましていない……。筈。」

「筈？」

思ったとおり、リンの顔はまた暗くなつた、そんなリンを見て心

が痛んだが、完司はふと湧いた疑問を躊躇することなくぶつけた。

「連絡が来ないから、わからない。」

「『新』から?」

「つりん。」

リンは首を横に振った。その間、初めてリンの兄弟について聞いた日から早くも少し伸びた髪の毛が軽やかにふわっと広がる。

「あ、違わないかも。でも、連絡をくれるとしたら亞貴さんだと思う。」

だつてもし最悪のパターンになつたら新が連絡できる訳がない。その考えは気を抜いたらいつも浮かんでしまう。

あの日、新がリンの手を握ろうとした瞬間、雪でハンドルを取られた車が後ろから新の体を吹っ飛ばした。空中へと浮かんだ新の体はそのままリンへと向かい、リンを下敷きにした状態で電柱へと激突した。その時リンの携帯電話は鞄ごと車のタイヤに潰され、粉々になつてしまつた。携帯電話は買い直したもの、新の連絡先も前の携帯電話ごと消えてしまつたのでこつちから連絡を取ろうと思つても取る事ができない。

仮に連絡先を暗記していたとしても、きっと連絡することは出来なかつただろうけど。

「新しい携帯を持ち歩かないのも、それが原因なの。」

連絡を待つてしまふから。手元に携帯電話があつたらいつ連絡が入るのか気になつて仕方なくて、何も手がつかなくなつてしまふ。だから普段は持ち歩かないし、家でも基本的に電源を切つて一日に一回、たつた数分間だけ電源を入れるといういう日々を過ごしていた。

「病院に会いに行かないのか?」

「行けないよ。目を覚まさない新の姿なんて、見れない。」

あの事故の後、新の下敷きになり電柱に突つ込んだリンは全身打撲となり、しばらくベッドに固定される日々が続いた。幸い骨折はしていなかつたので、しばらくじっとしていれば痛みは治まり体は動かせるよつになつたけど、寝たきりになつている新をみて身動き

をとれなくなつたのを覚えている。

「ドラマとかで色々声を掛けると意識が戻る、とかいう話あるけどさ、私は何の反応もない新を前にそうすることは出来なかつた。」

「リンの声で涙が溢れてきているのだとわかつたけど、その涙を完司はぬぐつことができない。ぬぐつたら、きっと抱き寄せてしまう。だから亜貴さんに、もう来ない方がいいって言われちやつた。」

それはもちろんリンを心配したことだつた。痛みが治まつたとはいえ、リンもそれなりの怪我をしたのだ。これ以上精神的な負担がかかると、リンの体に良くない。それに最悪のことを考えるともう新のことは忘れた方がいいのかもいのかもしれない。

亜貴は泣きながらそう言つた。

「何かあつたら連絡するからつて……」

その時のこと思い出すと次から次に涙が溢れて、リンの目からこぼれた。

亜貴の言つることも理解できた。だから何も言えなかつた。本当は新の傍に居たいのに、力になりたいのに。でも、どうすればいいのかわからない。何も出来ない。昨日の様に泣く」とさえ出来なかつた。

私は、弱い。

「で……でも、福岡には……つ……戻れなかつた。新とのつ、思い出が……溢れてる、学校になんて、戻れる……訳が……」

嗚咽しながらリンが切れ切れに喋る。本当は気が済むまで泣いて、その後落ち着いて話を聞く方が良かつたのかもしれないけど、完司はリンの抑えきれない感情を全てそのまま受け止めたかった。

「それで東京に来たのか。」

完司はずつと疑問に思つていていた謎がようやく理解出来た。リンは

泣きながら首を縦に振つた。

「……戻れない……からつて……そしたら、部屋つ……貸し

てつくれ、て・・・・

ホテルの？と完司はふと疑問が思つたが、さすがにそれは質問しなかつた。さすがにそんな雰囲気じやない」とくらいはわかっている。

「新の・・・じと、思いつ、出でなこよつ・・・・方言も、使わない・・・よつこ、してつ・・・」

必死に自分を抑えた。一度崩れると、もう黙りにならぬつな気がして。

「馬鹿だなあ、リンは。」

完司は心の中でつぶやくつもりが、思いつきり口に出してしまつていた。リンが涙と鼻水を流したまま「えつ？」という表情で顔を上げて、しまつたという顔をした完司と目があつた。

「あー、だから・・・馬鹿なんだよ。」

開き直つたかのような完司の台詞は予想外の言葉だつたのだろう、リンの涙が止まつた。俺、すごくね？なんてこれは心の中で思つた。「忘れることなんて出来ないくせに、やつやつて抑えるから不安定になるんだよ。」

ずずつとリンが鼻水をする音が夜の公園に響く。

「その事故の後、昨日のように泣いたか？」

リンがふるふるつと首を横に振ると、また軽やかに髪の毛が広がつた。

「その、亜貴さんとかいう人や自分のお姉さん以外に、今事故のこと言つたか？」

リンがまた首を横に振る。

「一人で、全部乗り越えるつもりだつたのか？」

今度はリンの首は動かなかつた。困惑の顔で、完司をじつと見つめている。

「泣かなきや駄目なんだよ、辛い時は。思いつきり泣いて、気持ちをリセットするんだ。泣く気力がなかつたら、体が元気になつてからでいい。いつでもいいんだ。涙を、体の中に溜めるのだけは絶対

に駄目なんだよ。」

完司はまた涙が溢れてきているリンの頭に両手を置いて髪の毛をわしゃわしゃっとかき乱した。

「なっ、完司・・君?」

驚くリンを無視して、完司は言葉を続けた。

「一人じゃないんだからさ、もつ抱え込むなよ?」

完司の手を引き剥がそうとしていたリンの動きがピタリと止まる。

「思い切り泣いて、そしてぶつかれ。」

完司もリンの頭の上に手を置いたまま、動かすのを止めた。

「リンにはお姉さんやお兄さん、友達、それに俺達も居るじゃねえか。頼れよ。」

肩の震えで、リンがまた泣き始めたのがわかつた。完司は抱きしめたくなる葛藤と戦いながら黙つてその様子を見守つた。

本当は新なんて待たずに俺の横に居ろよ、といいたい。だけど、無理だな。これだけ新への想いを見せつけられるとリンを振り向かせる自信なんてない。

だから、どうか願つよ。リンが幸せになれるよう、応援するよ。まだまだ子どもなのに、年上というだけで大人ぶつている俺だけど。「後、俺の個人的な意見だけど、『待つてろ』って言われて待つ必要がない時もあるんじゃないのか?」

泣くことで精一杯なリンの耳に届いたのかはわからない。だけど、それでもいい。今はとりあえず泣いてしまえ。体中の水分がなくなぐるぐるに。

一人しか居ない閑静な夜の公園で、リンはいつまでも泣き続けた。

そして、そんなリンを完司はいつまでも見守り続けた。

14・リンの決意

「はあー。」

「そんなことが・・・」

昼休み終わりの屋上で、リンから話を聞いた佳澄と彩女はそれぞれ深いため息をついた。リンは新のことと佳澄と彩女に今までのことを話した。一度に複数の人に自分の本音をさらけだすのは生まれて初めてだと思う。

キーンゴーン・・・

昼休みの終わりを告げるチャイムが校内に響いても、三人はそこを動かなかつた。気温が上がつた暖かな空氣の中、並んで澄み切つた青空を見上げている。

「で、どうすんの?」

「え?」

チャイムが鳴り終わると同時に、彩女が口を開いた。

「タカスンは、このまま待つの?」

今度は佳澄が聞いてくる。一人の視線が、青空からリンへと移る。リンは青空を眺めたまま、無言で微笑んだ。その表情は柔らかく、落ち着いた雰囲気をかもしだしていた。

「とりあえず、学年末テストがんばるかな。」

真ん中に居たリンはすくつと立ち上がり、思いつきりのびをした。

「「はつ?」」

佳澄と彩女の声がハモつた。

「新の所に行くのに、中途半端な自分では会いにいけないや。」

リンは言い終わるとくるん、と一人の方を向き、そして二人の顔を見つめた。

「待つてくれて、ありがとう。」

作り笑顔なんかじゃない、本当の笑顔でお礼を言った。それに思わず見とれてしまった佳澄と彩女を置いてリンはリンはスタスタ出入口の方へと歩き始めた。

「タカスン？」

佳澄の呼びかけに、リンがピタッと立ち止まる。

「やることちゃんとやって、それから新に会いに行こうと思つ。学生の本分は勉強、なんてそこまで真面目じゃないけどさ。でも、勉強は嫌いじゃないし何か少し自信になるようなことがあつた方が堂々と新に会いに行ける気がして。だから、来週から始まるテストを頑張るうと思つの。」

あの事故の後からリンは自分を中途半端だと思つていた。授業もちゃんと受けず、誰にも心を開こうとせず、かと言つて新に会いに行くことも出来ず、ただ生きているだけだった。

そんな自分では新に会えない。胸を張つて新に会いたい。その為に手つ取り早いのは、まず勉強しか思いつかなかつたのだ。

「授業戻るね。話聞いてくれてありがとひ。」

そう言つてリンはあつという間にドアの向こうへと消えてしまつた。

「一方的に喋つて行つちました。」

「意外と自己チューだな。」

自己チュー＝自己中心

リンが居なくなつてから少しボー然とした後、二人で顔を見合わせてどちらからともなく笑い出した。

「パネエ！」

久々に飛び出した「パネエ」が、同じように授業に出でいない生徒が数人居る屋上に笑い声と共に響いた。

一月の終わりの、春の口差しを感じる口の事だった。

「こんにちは。」

テスト頑張る宣言から一日経つた火曜日の放課後、リンは図書館

に来ていた。

「おお、リンちゃん。いらっしゃい。」

カウンターに立っていた浦田さんがニッコリ笑いながら迎えてくれた。

「本、返しにきました。来週テストなんで、しばらくここに来るのをお預けにしますね。」

そう言つてリンはカウンターの上に鞄を置き、借りていた本をせかせかと取りだして浦田さんに手渡した。

「そうか、寂しいけど仕方ないね。頑張りなさい。」

自習禁止の図書館なので引き止めることはなく、リンから本を受けとりながら浦田さんはただ応援のエールだけを送つた。

「はい。完司君は本を並べてるんですかね？」

パツと周りを見渡した感じ、完司の姿が見えない。浦田さんがカウンターに居るという事は、完司はおそらく本を並べているに違いない。浦田さんもそうだよ、という風に頷いた。

「あ、居た。」

噂をすれば何とやら、本棚と本棚の間の通路をリンに背を向けて歩く完司の姿を捕らえると、パタパタと追いかけた。

「完司君。」

「おお、リン。こりこりしゃー。」

浦田さんと同じ反応を示したので、思わずフツッと笑みがこぼれてしまつた。

「何?」

「ううん、何でも。完司君、私来週テストなんだ。」

完司の質問を無視して、さつさと本題に入り出す。いきなり話題が変わるのはもう慣れているので、完司はそのまま聞き入れ、浦田さんと同じよろこびに応援のエールを送つた。

「ちゃんと勉強してテストを受けて、そしたら新に会いに行こうと思つ。」

背筋を伸ばして真っ直ぐと完司を見据えて言つた。自分を抑えて

いた頃と違つて、しつかりした顔つきになつてゐる。

「……………そうか。」

完司はそれしか言えなかつた。正直好きな女の恋路を応援したくないという気持ちもあるけど、立ち直り始めているリンに勘付かれないので、やうなるべく平静を装つた。

「じゃ、もう帰るね。」

「おう。テスト終わつて、時間あるなら来いよ。」

「うん。」

すぐに方向転換して足早に歩き出したリンは浦田さんに挨拶してあつという間に姿が見えなくなつた。リンの姿が視界から消えると、完司はハアッと一息着き、気持ちを切り替えてまた仕事に取り掛かり始めた。

「へつ？」

今日の勤務も終わり、帰るうとした頃、浦田さんが完司を食事へと誘つた。

「今日は歌の方もないんでしょう？ だったら家にいじ飯食べにいで。妻も久々に会いたがつていいよ。」

確かに今日はバンドの練習がない。浦田さんの奥さんにも最近会つてないし、久々に美味しい手料理を「こちそつになるかな」と思つて完司は「はい。」と二つ返事をした。それが浦田さんなりの励ましだと、完司は気付いていた。

「今日は温かつたねえ。」

一緒に図書館から出ると、冬の刺すような痛い寒さが感じられない空気を感じて浦田さんがほのぼのと言つた。

「そうですね。」

「桜の花が咲くのにはもう少し時間がかかるねえ。」

「もうそんな時期なんですね。」

完司はバンドを結成し始めてもう一年になるのか、と心の中でつぶやいた。去年、桜の花が散り始めた頃に完司達四人はグループを

結成した。まさか自分の人生に音楽が欠かせないものになるなんて、あの時は思いもしなかった。

「咲いた花が散つて、また新しい花を作る。もしかしたら植物は人間よりずっと強いのかもしないね。」

「えつ？あ、そうですね。」

穏やかな性格からは想像できない速さで歩き始めた浦田さんに、完司も慌てて後ろを付いていく。

「でも、人間も自分達で思つているよりはずっと強いんだよ。だから完司君、いい歌を作つてまた聞かせてね。」

「あ、新曲の歌詞チェックまだしてねえ。」

何が『だから』なのか疑問に思う人がいるかもしれないが、色々な経験を積むと歌い方にも違いが出てくる、と昔言われたことがある。つまり、失恋をしてさらに歌に味が出る様歌手としていい経験に変えなさい、という浦田さんなりの応援なのだ。

浦田さんと出会つて約五年、言葉が少なくとも浦田さんの言つたことは大体わかるようになつた。と、思う。

「今日は生姜焼きだつて。」

「やつた！」

浦田さんが晩御飯の献立を教えてくれて完司は喜んだ。成人になつたとはいえ、まだまだ完司も子どもだ。そんな完司を微笑ましく見ながら浦田さんは相変わらずのスピードで歩いていく。

二人の姿が夜の暗闇の中に消えていつても、楽しそうな話し声が途切れることはなかつた。

15・キスで目覚めるー?

「終わったあー。」

「あー、マジやべえかも。」

学年末のテストが終わった瞬間、彩女からは嬉しさの声が、佳澄からはうなだれの声が聞こえてきた。佳澄は国立系のクラスを狙っているため、それなりの成績を取らねばならない。勿論希望者の数にもよるが、点数がいいにこしたことはない。

「で、タカスンは・・・」

一人の視線がリンの方に向くと、リンもそれに気付いて一人の方に近づいてきた。リンは最近では珍しくなったニッコリ顔で、右手でブイサインを作った。

「すげえ。最近まで授業中ほとんど寝てたヤツが。」

「やっぱ超進学校にいつてただけあるなあ。」

「人がハアー、と深い息をつきながら呟いた。

「いやいや、進み具合が向こうのが早くてかぶつてる部分があったから。」

「それでも出来ない人は出来ないってえー。」

「やっぱタカスンはパネエよ!」

慌てて謙遜するリンに、一人の咳きは終わらない。

「これからが、大変だな。」

ボソッと呟いたリンの一言に一人が驚きの表情で顔を上げた。

「あ、今から新的ところに行くから・・・」

「もう?」

「すぐに?」

一人の顔が一気に真剣になり、リンの顔をじっと見た。リンは落ち着いた顔でこくり、と黙つて頷いた。

「行ってらっしゃい。」「

佳澄と彩女の、重なった背中を押す一言にリンは相変わらず強い

眼差しで返事をした。

「行つてきます。」

とうとう来てしまつた。

大きい病院の前に辿り着くと、リンは大きく深呼吸をした。自分が退院してから一度も来ていない病院に、懐かしさは全く感じない。一応新の入院している部屋を受付で確認すると、最後に新の姿を見た部屋と変わつていなかつた。全てあの時と変わらぬまま、時間がだけが過ぎてゐるのだろうか。新の部屋の前まで来てそつ考へると、なかなかドアを開く事が出来ない。

少しの間、ドアの前で立つてゐると

「リンちゃん？」

今度は懐かしい、と思える声がした。声が聞こえてきた方を向くと、亜貴が立つていた。亜貴はリンの姿を見て一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにいつもの落ち着いた雰囲気になつた。顔色が少し悪い気がする。

「・・・・・ こんにちば。」

「こんにちば。」

失礼なことに、リンは亜貴に会つことを頭に入れてなかつたので一瞬固まつてしまつたが、とりあえず挨拶をした。

「体はもう大丈夫なの？」

亜貴の優しい気遣いに、リンは黙つて頷いた。

「新に、会いに来たの？」

少し不安を顔に浮かばせた顔で、亜貴が続けて質問をしてくる。

「はい。」

今度は口に出して返事をする。

「もう、逃げたくないんです。」

亜貴を真つ直ぐに見つめて率直に言つた。

「ありがとう。新を、宜しくね。」

亜貴の口からはまたいつも決まり文句が出たが、いつもと違うことが一つあった。一つは、この台詞の後に決まって照れる新がここに居ない事。そして、もう一つは亜貴が本当の笑顔じやないことが。「じゃ、私は邪魔だらうからもう帰るわね。」

「亜貴さん！」

足早に去ろうとした亜貴を、リンは慌てて引き止めた。亜貴はピタリ、と止まった。

「私、事故の後、正直東京に来なければ、と思つていました。」

亜貴に何を言うかを頭の中でまとめていなかつたのが、とりあえず何かを言わなくてはいけない。その気持ちでリンはとりあえず言葉を続けた。

「高校生なのに贅沢したからバチが当たつたんだ、とかあの日うどんじやなくてパスタにしていれば、とかそもそも東京に来なければ、とか思えば思つほどキリがなくて。」

亜貴はリンに背中を向けたまま黙つて話を聞いている。

「でも、事故にあって気付けたこともあるんです。自分一人では立ち直れない弱さ、新への依存度の強さ。」

一人で生きていけない事など、とうの昔から気付いていた。でも、それを認めてしまうと自分は弱いんだつて認める事になる。だから頭の中ではずつと否定していた。

それが弱さだと、気付いた。

「私、自分がすごく弱い人間だつて気付いたんです。」

その弱さは新への負担になつていていたのかもしれない。そうでなくとも、きっと自立心の強い新にとつて負担になる日がいつか訪れていただろうと思えた。

「だから、私強くなります。悪いことでくよくよするだけじゃなくて、いいことを拾つてプラスにできるよう！」

話しているとリンの視界が滲んできた。でも、完司が泣きたい時は泣けばいいんだと教えてくれた。だから我慢なんかしない。

「新と東京に来たことは後悔していません。楽しい思い出も作れま

したから。亜貴さん、東京に招いてくれてありがとうございました。

「亜貴の肩が震えている。泣いているんだ。

きっと優しい亜貴はずつと自分を責め続けているに違いなかった。自分が誘わなければ、と。

「仕事に、戻るわね。」

亜貴はそう言って振り返ることもなく、足早に歩いていった。今度はリンは引き止めなかつた。どうか、リンの後悔していないという気持ちが伝わって少しでも罪の意識が軽くなればいい。大好きな亜貴に、また笑って欲しい。リンは心からそう思った。

亜貴の姿が完璧に見えなくなると、リンは再びドアの方を向いて、今度はためらうことなくドアを開けた。個室のため、一個しかないベッドに新の姿を確認できた。

「懐かしい曲。」

ドアを開けると一人でよく聞いていた曲が流れてきた。

後から知ったことだが、意識を失っている人にはとにかく刺激を与え続けることが大事で、マッサージのように手や足を動かすことも効果があるし、人間の五感で最後まで生き残る耳からの刺激を常に与えることも良いとされているらしい。だから新が一人の状態の時はこうやって音楽を流しているのだった。

リンは真っ直ぐにCDプレーヤーの元に歩き、そして一時停止のボタンを押した。自分の声だけを新へと届けたかったからだ。

「新。」

リンはCDプレーヤーから新の方へと体の向きを変え、近づいた。

「弱くてごめんね。」

返事の返つてこない新を目の当たりにすると、やっぱり悲しい気持ちが込み上げてくる。思つていたよりも、ずっと辛い。

でも、負けない。負けるもんか。

「これからは出来るだけ毎日来ようと思つ。出来るだけ、ね。」

新がまた目を覚ますことを信じて頑張りうと思つ。女が男の目を覚まそうとするなんて『眠れる森の美女』の逆だな、と思つた時ふとした考えがリンの頭の中をよぎつた。

「王女は王子のキスにより目覚めたんだよね。」

確かにそうだけど、私は何を考えているんだ、とリンは全身が熱くなつた。でも、もしかしたら、なんて希望も湧いてくる。可能性が少しでもあるなら、たとえ笑われても試してみたい。

そう思つて新の顔へ、自分の顔を近づけた。どちらかと言へばキスは新からしてくるのを待つていたけど、今回は・・・

「やっぱり、無理！…」ゴン ドサッ

あともう少しでお互いの唇が触れるところでリンはそんな少女キヤラじやない！と叫ばんばかりに体を後ろへ逸らした。それと同時にプレーヤーの置いてある棚の角に体をぶつけ、落とした鞄が足に直撃し、思わずその場にうずくまる。

「私は一体何をしているんだ。」

自分の馬鹿さ加減に呆れながら、リンは一瞬痛くなつた体をゆっくり起こした。そして棚にぶつかつた衝撃で再び流れ始めた音楽を止めようと、プレーヤーのボタンを押そうとした時に異変を感じた。

「リ、ン？」

亞貴の時よりも、懐かしいと思える声が耳から入つてきた。リンは金縛りにあつたように、体が動かない。

「リ、ン？」「

反応のないリンに向けて、また懐かしい声が聞こえてきた。リンは、おそるおそる振り返つて新を見た。

新の顔がリンの方を向いている。さつきは真つ直ぐ天井の方を向いていたのに。

新の目が開いている。さつきまで硬く閉じられていたのに。

「リ、ン。」

口が開いている。わつわつと上歯と下歯がくつついていたのに。

新？

リンも、新の名前を呼んだ。それに反応して新が少し嬉しそうに微笑むのを見ると、堪えきれなくなつた気持ちが一気に溢ってきた。

卷之三

リンは泣きながらその場に崩れ落ちた。体の水分が枯れるくらい泣いてまだ一週間も経っていないのに、一体どこからまだ涙が出てくるのだろう。

『新』以外の言葉が出てこない。『新』以外の言葉が浮かはない。『新』以外の言葉は存在しないんじゃないのか。それぐらい、リンは新を呼んだ。会えなかつた分を埋めるように、何度も、何度も。

リンは頑張ると決めたものの、心のどこかでは怯えていた。新が田を覚まさなかつたらどうしよう、と。不安だった。でも新は田を覚ました。今、リンの田の前で。

神様なんて信じない。

この考えは多分一生変わらない。

だけど、新の言葉は信じてたよ。

リンの大きな泣き声で通りかかった患者さんが野次馬のように集まり、驚いた医師や看護師が部屋にすつ飛んできたけど、リンは構

悲しみや辛さじやなく、嬉しさの涙を弾び流れ始めた曲と共に、

いつまでも流し続けた。

「マジか！？」

「おめでとう！」

新が目を覚ました次の日、リンは朝学校に着くなり佳澄と彩女へと新が目を覚ましたことを報告した。

「良かったなあ。」

「でも鞄を落とすなんて、タカスン意外とドジだなあ。」

一人には鞄を落とした衝撃で目を覚ましたことにしておいた。キスをしようとしていたなんて言うの恥ずかしいし、棚にぶつかったことも理由を聞かれると恥ずかしいのでふせた。多分鞄を落とした音も目を覚ました原因の一つだろうし、嘘ではないとリンは自分に言い聞かせながら、ハハッと笑った。

「でも、これからが正念場だよ。」

目が覚めました。ハイ、これから元の生活に戻りましょうなんて無理な話だった。脳や体に異常が表れてこないか、意識を回復してからもしばらく検査や観察が必要だし、何よりしばらく眠っていたせいで新の体は自由に動かすことができなくなっていた。骨折や筋力の低下などが原因で自分で体を起こすことも無理だったのだ。けれども、

「生きててくれたから、とりあえずそれだけいいや。」

そう思えた。リンの落ち着いた笑顔に佳澄と彩女もとりあえず一安心した。

「新。」

「リン、今日も来ててくれたのか。」

授業を終えた後、リンは図書館に立ち寄ることなく真っ直ぐに病院へと向かつて来た。

「調子はどう？」「

「体が動かない。」

体を自分で起こせないことにイライラしている様子が新の表情から見て取れた。ベッドのリクリーニング機能で少し体を起こした状態で、からうじて顔だけリンの方に動かせている。

「何か、検査した?」

「午前中レントゲン撮つた。骨折は少しづつ回復してるつて。」

新は車が突っ込んできたせいで左の肋骨に左の大腿骨(足の上方)、それに電柱に追突する際にぶつけた額とリンの頭を庇つて犠牲にした左腕の骨折をしていた。リンがクツションになったことから額は少しヒビが入つたくらいで済んだが、もし思いつきりぶつかつていた時のことを考えるとゾッとしてしまう。

しかし意識がなかつたというのに、確実に骨を治癒(ちゆ)していた人間の体はすごい。

「そつか、痛みは?」

「薬が効いてる。でも寝返りうつないから、尻とかが痛い。」

「骨折の痛みをほとんど感じないだけでも、マシかもしねない。」

「髪、一気に切つたな。」

ベッドの横の椅子に座つたリンの髪を懐かしむような雰囲気で新が言った。

新は結べないほど髪の毛が短いリンを今まで見たことがなく、東京に一緒に来た時にはリンの髪の毛は肩甲骨(けんこうこつ)辺りまで伸びていた。そのほどほどに長かつた髪の毛を、リンはあの事故の日の事を断ち切るかのようにバササリと切り落としていた。

「また、伸ばすよ。」

幸せな日々だったあの頃のように、そして願掛けの一種のようこれから伸ばしていくとリンはたつた今決意した。

「あ、面会時間もう終わりかあ。」

この病室で約三時間半過ごした頃、面会時間の終了を告げる放送が病院内に流れた。

「暗いから気をつけて帰れよ。」

新が名残惜しそうに別れの挨拶をする。

「うん。明日も来るね。」

リンは膝の上に置いていた鞄を持って椅子から立ち上がった。元々そんなに喋る方じやないのに、まだまだ新と喋りたい気分だつた。しかし、最低限のルールは守らなくてはならない。名残惜しそうにリンも挨拶をして部屋を去りつとした瞬間、新に呼び止められた。

「キスしたい。」

新が少し頬を染めた状態で、ストレートに物申してきた。そうだ、新はムードなど関係なく自分の考えをズバツと言うタイプなのだ。そういうふうにころがイライラせずにはきなのだが、あの新の目を覚ました時のこと思い出しても、リンの顔は真っ赤になつた。

それにつられて新の顔もせつときよりも赤くなる。

「そんなに照れることか？」

「て・・・照れるよ！」

あの時の事がなくとも、自分からキスしようなんて・・・正直思つたことあるけど、実行したことがない。しかも、新からお願ひされてするなんて普通に考えたら照れる。でも、

「目、つぶつて。」

恥ずかしいので、リンは新の目を見ずにそう要求した。新は一コツと嬉しそうに微笑んでリンの言う通り目をつぶつた。リンは一度ゴクリと唾を呑み込み覚悟を決めて、新の顔へと自分の顔を近づけた。心臓がバクバクしている。

「やつぱり、無理！！」　「ゴン　ドサツ

リンは自分の心臓の音に耐えられなくなつて体を後ろに逸らすと、見事に昨日と同じようにプレーヤーの置いてある棚の角に体をぶつけ、落とした自分の鞄が足に直撃し、その場につまずくまつた。しかも停止していたプレーヤーから曲が流れ始めるということまで一緒だつた。

「痛つ。」

何とも間抜けなパターンなのであらう。リンは恥ずかしくて顔を上げることができない。

「今、何か聞き覚えのある音だつたな。」

新がこらえ切れずに少し笑つてゐる。それに気付くとリンの中で益々恥ずかしさが込み上げてくる。

「よくあるような、珍しい音じゃないよね。」

リンは気を取り直して鞄を持って立ち上がる。あの時の事は絶対に教えてあげない。そう心で思うリンと何も知らない新の目が合うと、二人は吹きだして笑い始めた。

こんなに大声で笑つたのは一体いつぶりだろう。ましてや一人でこうやって笑うのは初めてかもしれない。

「新。」

「ん？」

「もう少し、度胸が付くまで待つて下さい。」

「何で敬語なんだよ？」

そう言つてまた新が笑い出す。新がこんなに笑うなんて、知らなかつた。こうやって笑う日々がずっと続けばいい。体を自由に動かせないけど、笑つて過ごせたら何とかなりそうな気がする。リンはそう思つた。

だけど、現実はそんなに甘くなかった。

「新 つてあら。」

次の日もリンは図書館に向かわずに、学校から病院に直行して來た。病室のドアを開けると新は眠つており、代わりに亜貴が迎えてくれた。

新が目を覚ました日、すぐに亜貴に連絡した。すると電話の向こうで泣き始める声が聞こえて、またもやリンは一緒に泣いた。それ以来、二日ぶりである。顔色が二日前よりも大分良くなっている。

「検査もだけど、今日リハビリ計画も立てたりしてね。少し疲れたみたい。」

「そうですか。じゃあ田を覚ますまで待ちます。」

あいにく最近図書館に行つていないので、暇つぶしとなる本がない。何をしようか、とリンが考え始めると机に置かれた資料が田に入つた。検査結果や、今後のリハビリ計画などが書かれている。「私、もう行くわね。新しいCD持つてきたから、たまに流す曲変えてもらつていい?」

仮にもホテルの管理者、亞貴はリンの返事を聞く間もなく忙しそうに部屋を出て行つた。

リンは早速新しい曲を掛け始め、椅子に座つて机に置かれていた資料に目を通し始めた。専門用語の難しい漢字は読めないし、よく意味も理解できないが、簡単には治らないと悟ることは出来た。

「これからが正念場。」

リンは佳澄と彩女の前で言つた台詞を、もう一度自分に向かつて言つた。

一番辛いのは新なんだ。だから、私も覚悟して取り掛からなければいけない。

「一緒に頑張ろうね。」

眠つている新に向かつてリンはつぶやくよつと言つた。

「おはよう。」

「リン、久しぶりだな。」

学校が休みの土曜日。病院の面会時間は午後からなので、リンは空いた時間の午前中に図書館へと足を運び、完司に挨拶をした。二人が知り合ってからはほとんど毎日会っていたようなものなので、十日間も会わないのは初めてのことだった。何か少し、照れくさいものを感じる。

「おめでとう。」

切ない気持ちをグッとこらえて完司がリンを祝福した。新が目を覚ましたという次の日、落ち着いた声でリンが電話してきた。あの時も電話越しで祝福したが、直接会った時も祝福もしようとした決めていた。

だけど、リンの表情は少し元気がないよう見える。

「どうした?」

「うん、私に何が出来るかなって。」

昨日新が目を覚ますと、一昨日同様少しイラついているのがわかつた。リンと喋る時は平静を装っているが、体が自由に動かないのだ。ストレスが溜まるに決まっている。

「私みたいに少し安静にしてれば治るっていう保障もないんだもん。不安だつて強い筈だよね。」

新は思つたことはストレートに言つのに、リンを心配させるようなことを言わない性格だということを知つていた。だから、余計に心配になる。

「そこまで想われる新は羨ましいな。」

カウンターで少し暇を持て余していた完司がしみじみと言つ。からかわっているようで、リンは少し恥ずかしくなつた。

「リンが会いに来てくれるだけで、十分に力になると思つよ。」

俺だつたらあつとそう思ひ、なんて言えないので、本心で思つたことを完司は言つた。でも、そういう『思ひ』といつ抽象的なことでリンの不安は消えないようだつた。

「あ、すみません。」

カウンターの前に滯つっていたリンは、子供連れの若いお母さんが本を返そうとしていることに気付くとピカコヒと一歩横にずれた。今までに何回もやつてきたように借りた本を受け取り、返却の手続きをする間リンはじつとその場で下を向いて完司とまた話さうと待つてゐる。

「リハビリ関係の本つてある？」

手続きを一通り終えると同時に、リンが質問してきた。

「リハビリ・・・介護福祉の本ならあつたと思つけど。」「案内するよ。」

またもや、突然背後から浦田さん登場。未だにそれに慣れないので進歩がないな、と完司はつづく思つた。そして完司と居る時と違ひ、ゆっくりと歩き始めた浦田さんについてリンも歩き始めた。一体何度、リンの背後をこうやって見つめたことだろ？

「だから俺は中坊かつての。」

完司はキュンッと切なくなつた自分に冷静にツツコミを入れた。

「俺、いつまでこのままなのかな。」

病室で理学療法士から簡単なマッサージを受けた後、一人きりになるや否や新がそう切り出した。

「先生は、何て？」

「長期戦を覚悟しとけつて。」

検査をいくつかした結果、新は脳にはつきりとした異常は見られなかつた。しかし、体が自由に動かないということだけで不安を搔き立てるには十分だつた。クラスで一人で居るのが平氣だとしても、まだたつたの十七歳。子どもなのだ。

「若いんだから、一年や一年くれてやれ。」

リンだってまだ子ビも。何と返せばいいのかわからなかつたけど、無責任な慰めだけはしたくなかった。

「年寄りのよくな發言だな。」

新の顔が少し柔らかくなつてリンはホッとした。リンは新が早く家を出たがつてゐるのを知つてゐたので、本当は一年や二年が人生のほんの一部だとしても新にとつてはかなり長い年月に感じるだろうと氣付いていた。

「年寄りつて・・・さすがにひどくない?」

花も恥らう乙女の年齢なのに。でも、そりやつて憎まれ口を叩けただけまだ元気な証拠である。

少し経つてから、そう氣付いた。

「俺、いつまでこのままなのかな。」

「え?」

新の口から一日連続で同じ台詞が飛び出して、リンは驚きを隠せなかつた。

「ごめん。昨日も言つたよな。」

「ううん、謝らないで。弱音はどんどん出さないと。」

完司が言つてくれた言葉とは少し違つけど、弱音も不安も、涙同様に体に溜めてはいけないと思つた。

「窓開けようか。今日暖かいよね。」

三月に入り、もう春だと思えることが多くなつてきた。

「リン、何か変わつたよな。」

開けた窓から入つてきた風に心地良さを感じてゐると、ふいに新がリンにそう発言した。

「髪のせいじやない?」

「それもあるかもしけないけど、中身もだよ。」

確かに、東京に来てからリンの中で変化したことがある。それは、本音を言える友達ができたこと。前は友達と呼べるような人が居なかつたし、涙なんて見せられなかつた。

新の言葉が途中で止まつた。明らかに辛る

リンは何と言えばいいのかわからず、ただ窓から入つてくる風をしばらく浴びていることしかできなかつた。

一
会
い
に
行
こ
て
る
だ
け
で
も
大
き
い
よ
な
?

二十一

月曜日 リンは佳澄と彩女は自分の不安な気持ちを打ち出すと完司と同じ意見が返ってきた。場所はもちろん屋上。

所を三年ぐらます

いい
た。

力又ちたって！」

昭和二年

根拠のない発言だが、何故か元気が出でてくる。友達の存在つてこんなに大きいんだ。

「今日もいい天気だなあー。」

授業なんてあじえねえ

「もう二年か。
」

「受験かあ。」

学年末テストも終わり、三人が同じクラスで過ごせるのも後わずかだった。口には出さないが、それを感じる寂しさが漂っている。三人はチャイムが鳴つても、しばらく屋上を動かなかつた。

「おうす。」

「今田はいつもより遅かったな。

リンが病室に入ると、窓から入ってくる風を浴びながら少しへ

のある言い方で新が言った。

「うん、掃除当番で。」

リンはそんな新に一瞬怖さを感じ、思わず嘘をついてしまった。本当は授業が先生の都合で一時間短くなつて早く帰れることになつたので、三人で思い出作りと題してプリクラを撮つたりコーヒーを飲んだりしているといつもより少し遅くなつてしまつたのだった。しかし、新の様子を見ると正直に言えない。仕方ないと理由じゃないと、納得してくれないと思つたからだ。

「今日は何した？」

「マッサージと、リンちょっととこっちに来て。」

「何・・・っ！」

リンが新の促したように傍に近づくと、新が右腕をズルズルと掛け布団の上を滑らせてリンの手を触れるように軽く握つた。以前程の力もないし、ひんやりとした手だったが、新の確かな温もりを感じ取ることが出来た。

「マッサージのおかげもあって、多少力が入るよになつた。少しだけど、進歩しただろ？」

疲れの滲んだ新の笑顔を見ると、リンの目からあつとこつ間に涙が溢れてこぼれた。

「リン？」

リンは嬉しさよりも、罪悪感の方で胸がいっぱいだつた。新はこの嬉しさを伝えようと待つっていたのに、私は友達と遊んで嘘をついてしまつたなんて。

「涙は、まだふけねえや。」

新は腕をリンの顔の位置まで上げることはまだ無理そうで、少し悔しそうに言う。リンは膝立ちになり、ベッドの高さと自分の顔の高さを同じにして新の手を両手でぎゅっと握り締めた。

「ふけた。」

リン両手に握られた間から、新が指を少し動かしてリンの涙を拭つた。その嬉しさが、表情から見てとれる。

「ありがとう。」

拭つてもうつた直後にまた涙がこぼれた。

「リン、俺後遺症残るかも。」

衝撃的な発言にリンは言葉が何も出なかつた。

「電柱に突つ込んだ時、頭を打つた衝撃でしばらく意識が戻らなかつたんだ。組織的に異常がなくても、何か残ると覚悟しておいた方がいいって言われた。」

新は悲しそうな表情をしながら、淡々と一気に言つた。

「先に左腕が電柱にぶつかつてクッショーン代わりになつたから幾分マシみたいだけどな。」

新の目が少し光つているのがわかつてリンはまた涙が出てきた。

「新。新の腕がこのまま戻らなかつたら私が新の腕になる。足が戻らなかつたら足になる。失明したら・・・」

少しでも不安を和らげたかったのに、その先は流れてくる涙に妨害されてしまった。

「サンキュー。」

新のお礼が罪悪感をより一層強くさせた。

「ごめんね。嘘をついて。

一緒にリハビリ頑張ろうね。

言葉に出来ず、リンは心の中でそう新に伝えた。新はそれを感じ取つたのかのように、リンが泣き終わるまで優しい笑顔ですつと見つめていた。

前頭葉：脳のなかで最も高級（人間らしい）な部分とされています。大きく分けて3つの機能があります。

1・運動機能中枢：錐体路とか錐体外路とか言われるものの出発点です。ここから手足の先まで神経がのびていき、運動します。

2・運動言語中枢：発語に関する中枢です。

3・精神機能中枢：人間を人間たらしめるのに必要な高次の精神機能の中核です。意志、計画性、創造性などもここで司っています。ここがやられますと、人格荒廃などが見られます。

リンは家に帰つてから図書館で借りてまだ読んでいない本を読みあさつた。中には事故の後遺症に悩む家族の奮闘日記の本があり、脳の中でも大脳の前頭葉という部分の障害を背負つた内容に思わず釘付けとなつっていた。本には脳の構図も載つており、新が電柱にぶつけた額が前頭葉の部分に当たると人事のようには思えない。「発語と、人格は今のところ大丈夫。」

となると後遺症として考えられるのは手足の運動か。でもぶつけた時に脳全体に衝撃があつたわけだから、結局まだ油断はできないということもわかつた。

「素人が少し勉強したくらいじゃなあ。」

リンは本を広げたままベッドにごろんと横たわり、深いため息を着いた。病気や怪我には例外だつてたくさんあり得るみたいだし、知識を得たとしてもあまり心の気休めにはならなかつた。

「治りますように。」

そう願うことしか出来ない。完治して、また以前のように戻ることは奇跡なのかもしねれない。

だけど、そう願わざにはいられない。

先生や医療スタッフが言うには新の経過は良好なようだつた。新の治りたいという意志も強く、若いことから勢いもある。しかし、いきなり回復するわけではないので新のイライラは日増しに増えているように感じる。

「まだこれだけかよ。」

からうじて握れるよになつた新の握力測定値は一二十キロ。男子高校生平均の約半分の値だ。その結果にショックを受けた新の右手を、リンは握りしめた。

「思いつきり握つて。」

リンの意図が分からぬまま、新はとりあえず今出せる力でリンの手を握る。

「握られてる感触は十分にあるよ。」

正直な感想だつた。確かに相変わらず力は弱くて冷たいけれど、握られたその手からは新の必死さが伝わつてくる。

「少しずつ、ね。」

暫くそのまま握られていると、一度緩んだ新の手にまた力が入つた。

「少しずつ。」

新は無言でリンを握る手に何度も力を込めた。リンはその度に新の力をしつかりと感じていた。

「リンちゃん、ちょっとといい？」

帰ろうとしていたリンは今病院に着いたばかりと思われる亜貴に呼び止められた。面会時間はもう終わりなのに、どうしたんだろう？と首を傾げながらリンは亜貴の方へ近づいていった。

「義明兄さんに会つたりした？」

名前を聞くと一気にリンの顔が引きつった。義明兄さんは亜貴と新の兄に当たる人で、完司らNEXのスカウトに訪れていた長身の男のことだ。

「今日たまたま会つてね。新が目を覚ましたことは耳に入つていた

みたいだけど、リンちゃんが毎日訪れているのか？とか聞いてきてね。東京に居るの知つてビックリして。」

亜貴が心配してくれているのがわかる。義明は新ら兄弟の長男に該当し、当然跡継ぎのつもりで育てられ、育つてきた。しかし、祖父である会長は新を後継者にと考えており、父親に当たる社長や義明と対立をしていた。

継ぐ気のない新は幼い時から田の敵にされ育つたため、家のことを忌み嫌つていて。

「この前、偶然会いました。」

福岡の親戚宅から高校に通っていた新の家に行つた際、何度か義明に会つたことがあつたが好きにはなれなかつた。新共々見下され、新が飛び掛つて喧嘩になりかけた事だつてあるし、何より事故の時に嬉しそうにしていたのが許せなかつた。

「新のこと、何か言つてました？」

「事故のことは役員にも広まつてゐるから、その手前一度は顔出しきない」と、つて。

今的新に義明が会つことが良いとは思えなかつた。何とかして阻止したいけど、リンにそんな力は無い。それがわかるから悔しい。

「リンちゃん、これからもこうやって新に会いに来てね？」

亜貴も同じことを思つてゐるようで、不安な顔つきをしてゐる。

リンは頷き、鞄を握つてゐる手にギュッと力を込めた。

義明の動きは早かつた。学生と違つて、生活のかかつてゐる社会人はみんなそなうのかもしない。亜貴と会つた次の日、新の病室に行くと新よりも先に義明の姿が目に入つた。反射的に嫌な顔つきになる。

「可愛い弟のお見舞いに来たのに、感謝されないなんて悲しいものだな。」

建前で来たくせによく言つよ、と嫌な気持ちとは反して義明は心なしか楽しそうな気配さえある。リンは嫌な顔つきを崩さず視線を

床へと移した。

それにしても、聞き覚えのある音楽がどこからか耳に入つてくる。一度しか聞いてないけど忘れない、NEXの曲だ。一体どこから聞こえてくるのだろう。

「スカウトするつもりだつたからね。等身大の彼らを撮つていたんだ。あ、建物のオーナーにちゃんと許可をもらつてね。」

そう言つて義明はリンの居る出入り口の方にツカツカと歩いてきた。

「じゃ、忙しいので失礼するよ。」

一方的に喋つて義明はあつと「う間に居なくなつてしまつた。何が言つたかったのか全くわからない。

「新？」

リクリエーミング機能で体を起こした状態の新の手元にはビデオカメラが置かれており、そこからNEXの曲が映像と共に流れていた。

「新？」

リンの呼ぶ声に反応せず、新はビデオカメラをじつと見ている。リンは近付いて再生されているビデオカメラを覗き込んだ。客席の方から撮つたと思われる映像の端っこには、ステージの傍らで聞いていたリン達三人もバツチリと映つていた。あの日の自分を見るとまるで別人の様だ。

再生が終わつて部屋の中が静かになつても、新は喋ることなくただビデオカメラの画面をじつと見続けている。

「新？」

リンの三度目の呼びかけによつやく反応し、新が顔を上げた。

「これ、いつ頃行つたんだ？」

「え？ええと。」

マメな事に手帳に予定を書いていたことを思い出し、リンは鞄を開けて手帳を取り出すとハラリ、と挟んでいたプリクラが手帳の間からこぼれ落ちた。

「あ。」

一人の声が重なった。こぼれ落ちたプリクラはビデオカメラの辺りに落ち、しつかりと新の視界に捕らえられた。佳澄と彩女と三人で初めて撮ったプリクラには、『丁寧な』ことに日付が書かれている。

「この日付……」

リンの罪悪感が一気によみがえった。掃除当番と嘘をついてしまつたことを未だに新には黙つたままだったのだ。

「あの、ごめんなさい。」

「何で謝るんだよ？」

素直に謝るリンに、予想外の反応が返つてきた。

「俺が居なくとも、大丈夫なんだな。」

「え？」

「俺はもう、必要ないんじゃないのか？」

「新？」

何を意味しているのか、リンは理解できなかつた。

「リン、もう来るな。」

目も合わせてくれない新の考えをリンは必死に読みとらうとしたが、ショックで何も考えられない。

「別れよう。」

嫌。

「俺の人生に、これ以上お前を巻き込むわけにはいかないよ。」

嫌。そんなの嫌。

「もう、帰れ。」

嫌だ。

自分の気持ちを何故か言葉に出来ず、リンはただ涙を流すことしか出来なかつた。そんなリンの涙を拭おうとも見よつともせず、新はいつもより低い声で言葉を続けた。

「帰れ。」

嫌だよ。

言葉が出ないので、首を横に振つて気持ちを表した。

「帰れ！」

相変わらず目を合わせず、新が怒鳴るよひよひ叫んだ。今まで一緒に居て初めてのことだった。

リンは泣いたまま病室を走って飛び出した。病院の中は走らないなんていうマナーは頭の中から消え去り、ただ新のことだけで一杯になっていた。

「ごめんね。

リンは泣きながら、そつ懶つことじか出来なかつた

「あれっ、リン？」

仕事も終わり、図書館も締め切つて帰るひつした頃、完司は図書館の前に見覚えのある一人の少女が立ち尽くしているのに気が付いた。

「どうしたんだよ、病院は？新は？」

完司は近付きながらいつもと違うリンの雰囲気に気が付いた。泣いたことが一目でわかるように目は真っ赤で、涙が浮かんでいる。

「リン？」

「ふられ、ちやつた。」

リンは必死に笑顔を作つていたが、声が途切れるほど泣くことを我慢しているのが見え見えだった。

「いいぞ、泣いて。」

完司がそう言つた瞬間に、リンの目から涙がポロッと落ちた。きっと完司を待つていてる間、じつやつて我慢していたのだろう。

「私、最低だ。」

涙と共にリンの口からこぼれた言葉が、暗闇の中へと呑み込まれていった。

「プリクラねえ。」

落ち着いたリンを駅へ送るべく、少し前まで一人でよく歩いていた道を歩きながら大よその話を聞いた完司がつぶやいた。

「嘘を付いたのがいけなかつたんだよね。」

NEEXのビデオも原因の一つかもしれないなんて言えなかつた。言つたら、きっと完司も氣にしてしまつから。

「そうかなあ。」

「え？」

「リンは嘘を付いたから怒つて別れようつて言われたと捕らえてる

みたいだけど、俺はそう思わないな。」

完司は直接は新のことを知らないが、話を聞く限りではそんなに心の狭い人間の様には思えなかつた。もし、自分が新の立場だつたら、と思うと完司の頭の中によぎつた考えがあつた。

「自分のせいで事故にあつた、なんて罪悪感でリンを縛り付けている気がして嫌なんだよ。」

「私、そんなつもりじゃ。」

「リンにそんなつもりがなくとも、向こうが思つちゃうんだよ。男なんてカッコつけの生き物だからさ。現に、リン自分のせいで事故にあつたって思つてねえ?」

「うつ・・・・」

「わかりやすいんだよ、お前は。」

リンは図星をつかれて言葉につまつた。亞貴にああ言つた手前、やつぱり事故の原因是自分にあると思わずにはいられなかつた。どうしてもあの時ああしていれば、という考えは頭の中から消えてくれない。

「好きな人の自由を、自分のせいで奪つているようで嫌なんだよ。」

それは一理あるように思えた。新とリンは似ているところがあつて、新も自分が東京に行こうと言わなければ、とか同じようなことを考えているに違ひなかつた。

「まあそれだけじゃない氣もするけどな。」

「えつ?」

「福岡では新とほとんど一緒に居たんだろ?なのに東京で、自分の知らない友達ができて自分の知らない行動をとつて、疎外感を感じたんじゃないかな。拗ねてるんだよ。」

（「俺はもう、必要ないんじやないのか?」）

リンは新の言つた言葉を思い出した。福岡では友達と呼べるような人が居なくて、一緒に映画を観に行くのも勉強するのも文化祭を一緒に回るのも、常に新と一緒にだつた。新が居ないと、きっと高校生活を楽しいだなんて思えなかつたに違ひない。でも

「拗ねてるつて、子どもじやあるまいし。」

新に限つてそんなことは思えなかつた。頭もよくて成績は常にトップクラス、家のこと以外にはいつも余裕のある新に限つて。だけど、完司はサラリと言つた。

「子どもだよ。男なんていくつになつても。言つただろ？男はカツコつけだつてや。」

こんな風に偉そうに言つている完司だつて心中では新への嫉妬でいっぱいだつた。好きな女の子の恋愛相談に、心中は穏やかな訳がない。でも、カツコつけだからそんな思いを雰囲気にも出さないように頑張つているのだ。

「私、どうすればいいんだる。」

リンがうつむいたまま、不安な声を出した。

「休め。」

完司は即答した。

一人の人間を支えるなんて大の大人にとつても大変なことだ。逃げずに戦つているリンはそれだけですごい。本心でそう思つ。だけど

「休まないと、誰だつてもたないよ。」

リンの足が止まつた。

「休んで、それから考えろよ。大事なのは自分の気持ちだろ？」
リンにつられて完司も立ち止まつた。

「完司君。」

「ん？」

向き合つたまま、しばらく何かを考え込んでいたリンが顔を上げて完司の顔を見つめた。

「ありがとう。」

まだ少し涙の浮かんでまま、今度は作り笑いじやない笑顔でリンが言つた。

「前もこいつやつて話聞いてくれたのにちゃんとお礼言つてなかつたよね。だからその時の分も。ありがとう。」

照れ隠しからか、完司は公園の時のようにリンの髪の毛を手でく

しゃくしゃ」にした。

「反則だよ。」

暗くなつた空を見上げながら完司は溜息をついた。身長差のせいいもあるだらうが涙の浮かんだ上田遣いで、可愛い笑顔。思わずドキッとさせられた。年下に翻弄されるなんて、俺もまだまだ子供だ、と完司は思った。

「え？ 何？」

「教えない。」

何を意味しているのか理解出来ていないリンをその場に置いて、完司は歩き出した。少し遅れてリンも歩き始める。

「何？」

「何で俺がこいつアドバイス出来るかと言つとだな、」
まだ質問してくるリンから話を逸らす為、完司は別に聞かれてもいいことを語りだす。

「俺も同じだつたからだよ。アル中になつた親父から逃げ出して、浦田さんに救つてもらつたんだ。」

リンの顔は見えないけど、驚いているのがわかる。

「必死で何とかしようとがいたけど、結局親父の元を逃げ出した。」

「

リンは以前完司が図書館で寝泊りしていたところ話を聞いたことを思い出した。おそらくその時の話であろう。

「逃げた自分が情けなくて、でも泣くなんてみつともないとか思つてた時に浦田さんに出会つたんだ。自分を守るために逃げることも時には必要で、涙を抑えずに泣かないといけないって教えられた。」

「

完司は公園でリンが泣いた時、昔の自分を思い出していた。ただ違うのは、リンには変なプライドがないこと。泣けと言われれば素直に泣くし、自分が弱いと自覚していた。弱いと思い過ぎている感も否めないが。

「リンは強いよ。自分が思つているよりずっと。」

気が付けば完司の見送りはあともう少しで終わりだつた。駅が近くに立った証拠に、踏み切りの音が聞こえ、駅前にある店や電灯のおかげで路地も少しずつ明るくなつてきていた。

「完司君。」

すぐ後ろを歩いていたリンが名前を呼んだ。完司は「はいよ。」と体ごと振り返つた。いつの間にかリンは立ち止まっていて、少し距離が開いている。

「私ね、」

リンが決心したように話し始めると同時に、電車が線路を走る音が辺りに響いた。

「えつ？」

電車の走る音が遠くなり聞こえなくなつた後、かるうじて聞き取れたリンの言葉に完司が驚愕した。

「本気か？」

完司の問いに、リンは深く頷いた。

「後悔しねえか？」

少し間を置いて、リンがまた深く頷いた。

「そつか。」

リンの目から、また一粒の涙がこぼれた。完司はリンの方に歩み寄り、リンを自分の胸に引き寄せた。リンは抵抗することなく、完司の腕の中に包まれてまた一粒涙をこぼした。

次の電車が近付いて踏み切りの音が聞こえても、その次の電車が通り過ぎても、二人はしばらくそこで抱き合つたままだつた。

「「はつ！？」」

終了式の日、リンと佳澄と彩女の三人は体育館で話されている校長先生のありがたい話とやらをマイク越しに、やっぱり屋上で聞いていた。と言つても、ただ小さく校長先生の声が聞こえるだけで、実際には佳澄と彩女がリンの話を聞いているだけであつた。

「マジ？」

「何で？」

二人は驚きの表情を隠せず、一言の質問が続いた。

「私なりに、色々考えたんだ。」

春一番か春二番か春三番か、どの風かわからないが、少し冷たく強い風が屋上に居る三人を直撃した。

「イキナリで『ごめんね。』

風で髪の毛がボサボサになりながら、リンは一人に謝つた。

「タカスンは、いつも決めてから言うなあ。」

「ごめん。」

「謝んな。理由を言え。」

佳澄と彩女が、リンを理解しようと耳を傾けた。

「二人に会えて、良かつたなあ。」

心で思つたことが、ふいに言葉になる。

「バーカ。」

「今頃気が付いたのかよ。」

強気な発言をしながら、佳澄と彩女の目にうつすらと涙が浮かんでいた。それを見て、リンの視界も少し滲んだ。終了式の時間、ずっと強い風に吹かれ寒いと思いながらも三人は屋上で時間を過ごした。

三人で過ごした、最後の屋上だった。

「ねえ、リンちゃんと何があつたの？」

水を入れ替えた花瓶を窓際に置きながら、亜貴が新に尋ねた。リソングではないが、仕事の合間を縫つて新の様子をよく見に来ていた。亜貴は最近の新の様子がおかしいことに気が付いていた。

「・・・・・」

新は何も喋らずに、机に置いてあるリンが置き忘れて帰ったプリクラを眺めていた。リンに別れようと言つて、もう何日か経つていた。

「新・・・もづ。」

亜貴がまた尋ねようと新の顔を見ると、新は目をつぶつて眠つていた。だけど、それは決して狸寝入りじゃないとわかつていた。

最近の新は、口数が減り、リハビリを以前よりも意欲的に行つていた。理学療法士など医療スタッフのから受けるリハビリだけじゃなく、病室でも黙々と自分で出来ることを行い、そして気が付いたら疲れ果てて眠つていた。

「多分リンちゃんが来なくなつてからよね。」

新がおかしくなる原因として考えられるのは一つ。リンが絡んでいるに違いない。

「ここにちはー。」

新も眠りについてしまい、もづ帰ろづかと思つた頃病室のドアが静かに開き、小さな声で挨拶しながらリンがヒヨヒヨと顔を出した。

「リ・・・！」

亜貴が驚いてリンを呼ぼうとしたが、新が眠つていることを確認して口を閉じた。

「新今眠つてるから、外でいい？」

亜貴は小声でリンに確認した。今喧嘩か何かをして様子のおかしい一人と同じ病室に居るのはさすがの亜貴も気まずい気がした。リンもすぐに状況を把握し、ドアの場所で頷いた。

「亜貴さんにも話があるんですけど、時間大丈夫ですか？」

落ち着いた表情でリンが話しかけてきたことに亜貴は驚いた。新

ともめたりすると、一人揃つて様子がおかしくなつていたのに、今回は新だけだ。いつも何かがある度に仲裁の役割を果たしていた亜貴は、リンが東京に来て成長しているのだと気が付いた。

「え？」

「「じめんなさい、ずっと新に会いに来るつて約束したのに。」

亜貴はリンが言った内容にショックを隠せなかつた。喧嘩をしても、いつも何だかんだで仲直りして元通りに、いや、喧嘩をする度に一人の絆は強いものになつていてるようを感じており、それはこれからも続くものだと思っていた。それなのに

「いつから？」

「え？」

「いつから決めてたの？」

亜貴が悲しそうな顔をしてる。わざと思つてもいなかつたことなのだろう。

「新が目を覚ます、ちょっと前からです。」

「どうして？」

亜貴が少し睨む様な、理解できないといつ気持ちを前面に出してきた。

「新が目を覚まさなかつたら、新は何も知らないままで、もしかしたらそのまま目を覚まさなくて・・・それでも？それでも決めてたの？」

亜貴は新の「」を本当に大事に思つてる。それを考へると当然の考えだつた。

「亜貴さん。新が目を覚ましていなくとも、私は同じような道を歩んでたんじやないかと思つんです。時期は今じゃなかつたかもれない。だけど、いづれはこうなつたと思つんです。勝手で本当にこめんなさい。」

亜貴の目に涙が浮かんでいた。新とリンを応援していただけに、リンの固い決意は裏切りのようを感じたかもしない。

「・・・一人にしかわからないことが、あるものね。」

泣くのをこらえるような声で、亜貴が震えるように言った。

「亜貴さん。」

「「めん、賛成はできない。」

リンに向けてピシヤリと言つた。リンはある程度覚悟していたようで、一度は困惑の表情をしたもの、すぐに落ち着いた雰囲気を取り戻した。

沈黙した時間が一人の間で少し流れた。

「だけど、覚えておいて。」

亜貴もようやくいつもの落ち着きを取り戻し、正面からリンを見据えた。

「リンちゃんのこと、大好きだよ。」

「亜貴さん。」

亜貴のように、リンの視界も少し滲んだ。最近涙腺が緩んでいるのか、泣いてばかりだ。

「私もです。私も、亜貴さんのこと大好きです。」

自分の姉とは違つ雰囲気の、憧れの人。それは、きっとこれからも変わらないだろう。

「これが最後になつたりしないよね？」

亜貴が寂しそうに言つた。

「はい。」

リンも心なしか寂しさを感じた。ずっと新との傍で一番応援してくれた人。その感謝は言葉に出来ないくらい、溢れでいる。

「頑張つて。」

そう言つて亜貴は自分の右手をリンの方に差し出した。

賛成は出来ないが、固く決意をしているのならそれを応援しよう」と亜貴は決めた。大事な弟のことを思うとこれでいいのかはわからないけど、リンだって妹のような大事な存在。彼女の意思も、ちゃんと聞き入れよう。

「亜貴さんも、仕事とか頑張つて下さい。」

リンも自分の手を差し出して、亜貴の右手を握った。

「新のこと、お願ひします。」

まだ寂しさの残るままリンは言った。亜貴は少し悲しそうな笑顔でリンを見つめて静かに頷いた。

病室のドアを開けると、新は窓の外を眺めていた。

「新。」

リンがその内来ることを予想していたのか、新は特に驚くことはなかつた。

「もう来るな、つて言つただろ。」

リンの目を見ずに新が言つた。

「その割には追い出そうとしないね。」

「別れよう、つて言つただろ。」

「わかりましたって言つた記憶ないけど。」

新の視線がリンへと移つた。

「帰れ、つて言つたら？」

「帰らない。すぐにはね。」

そう言つてリンは棚に置いてあるプリクラを取り、鞄から取り出したはさみでジョキンと半分に切り始めた。

「東京でできた友達。一番右が佳澄で一番左が彩女。」

プリクラの半分を自分の手に持ち、半分を新の手元に置いた。

「彩女は手先が器用でね、ヘアメークとか美容師の道に進む予定なの。佳澄はまだ未定。」

ベッドの横に置いてある椅子に座り、リンははさみを鞄の中にしまうと共に一枚のCDを取り出した。

「それで、これが前新が見てたビデオのバンドのCD。ボーカルの人が図書館で働いてて知り合つたの。」

写真も何もない、シンプルなCDには新から別れを告げられた日に励ましの意味で完司がくれたNEXの曲が入つていて。完司の許可をもらい佳澄と彩女にはすでにコピーして渡していた。

「みんな、すごいいい人。今の私にはかけがえのない存在なの。」

何も迷うことなく、リンは真っ直ぐと新を見つめて言つた。新も、

目を逸らすことなくリンを見つめている。

「でも、新も必要。」

ゆっくりと一呼吸した後、リンは続けてはつきりと言った。

「この先、長い人生の中で私にかけがえのない人が増えても、新は必要。新は特別なの。」

相変わらず強い風が病室の窓を叩きつけ、ガタガタという音が静かになつた病室の中に響いた。

「俺もだよ。」

しばらく黙つていた新が、よつやく口を開いた。

「リンは特別な存在。」

「新。」

「だから別れようと思つたんだ。その気持ちは、嘘じやなかつた。新の表情が曇つた。あの日のことを思い出しているのだろう。」

「リンは俺みたいて寝たきりじやなくて自由だ。これから進路のことをかで大変な時期になるのに、俺の見舞いなんかで縛り付けてしまつとリンの将来を奪つてしまつ気がしたんだ。」

完句の言つたとおりだつた。リンのことを思つと、別れるのが一番いいと思つたのだろう。

「いいよ。」

「え？」

「奪つていいよ。その代わり、ちゃんと責任取つてよね。」

リンの強気な発言に、新は声を失つた。

「前に言つたでしょ。新の腕が戻らなかつたら私が新の腕になる。足が戻らなかつたら足になる、つて。あの時は確かに感情で突つ走つたけど、今は本気だから。」

「リン、でも。」

「私ね、リハビリの道に進もうと思うの。社会に出る頃には新はもう一人で生活できるようになつて、私はもう必要じやないかもしない。そしたら、新と同じように苦しむ人達の力になれたらつて思う。」

リンは話していると気が高ぶつて涙が浮かんできた。今日はもう三回も視界が滲んでいる。でも、それを恥ずかしいことだとは思わない。生きしていく上で、泣くことは必要なことだから。

「縛り付けているなんて思わないで。私が来たくて、来てたんだよ。

「俺は、リンにそこまで想われる価値のある人間じゃないよ。」
新の目にも、涙が浮かんでいる。新はそれを隠すかのように、下にうつむいた。

「別れようとか言いながら、リンを必要としている。そんな勝手な男なんだよ。事故の直前だつて、そんな優柔不斷さがあつたから事故つたんだ。」

「別れようと、したの？」

リンは体の血の気が一気に引いたのがわかつた。事故の後だつたらリンのことを気遣つてだとわかるが、事故の前に別れようとしていたのなら話が違う。気持ちが完璧に離れていくことになるではないか。

「違う。東京に戻るうつと思つたんだ。」

とりあえず別れる意思がなかつたことにリンは一安心する。しかし、すぐに気を引き締めた。

「東京に？」

「家のことから逃げないで、東京に戻つて来ようと思つたんだ。家のことを乗り越えないと、俺は今の地点のまま強くなれないって思つたから。だけど、リンと離れたくないとか思つたらあの時言えなくて。弱くて情けない男なんだよ、俺は。」

新がリンのプリクラを握りしめた。リンが見舞いに来ていた時よりも握力が強くなっているように感じる。

「あの時新が東京に来るなんて言つたら、多分笑つて送れなかつたな。」

そのリンの台詞に、新が顔を上げた。

「あの時は新が全てだつたから。新が自分の傍から居なくなるなん

て、絶対に耐えられなかつたと思う。私も、弱くて情けない女だよ。

「リンの目から、静かに涙が溢れて頬をつたつた。

「私達、一緒に居たらこれ以上成長できないね。」

二人の壁を作つたままだと、きっと二人共大人になれない。それは福岡に居た頃から薄々気付いていた。だけど、口にすると二人の関係が終わつてしまいそうでどつちからも言つことができなかつた。まだまだお互いに「子どもなのだ。

「そう、思う。」

新が静かに、諦めたように言つた。きっとこれで終わりだと覚悟したのだろう。

「でも」

「？・？・！」

リンは椅子から立ち上がり、ベッドの上から動けない新にキスをした。触れるか触れないくらいの、短くて優しいキスを。

「別れてやんないもんね。」

「リン。」

「女の子を待たせた罪は、重いんだから。」

新は事故の時の事を思いだした。体が飛んで意識を失いそうになつた時に絶対に死なない、リンは自分の手で幸せにするんだと思つたことを。

新の目から涙がこぼれた。今まで泣きそうになつても、絶対に見せなかつた姿をリンの前でとうとうさらけだした。

「リン。」

新がベッドの上を動き出した。元々ベッドのリクライニング機能で体は起きた状態だつたが、それに頼らず自分の力で体を支え、そしてベッドの端に辿り着くと両足を床の上に放り出した。

「新？」

「あの日から、リンのことを忘れようと無我夢中でリハビリしてた。体が疲れて、ベッドに横になつたらすぐ眠つてしまつくらいに。」

すでに疲れを感じ始めているが、かろうじて残っている力を振りしぶって新は自力で立ち上がった。

「リン、好きだ。お前を失いたくない。」

フラフラしながらも、新は真っ直ぐにリンを見つめて自分の気持ちを伝えた。

「新・・・あ！」

新は言い終えると、その場に膝からゆっくりと崩れ落ちた。そのまま前に倒れようとしたところを、リンが慌てて駆け寄り、体ごと抱きとめた。

二人共膝を付いたまま、抱き合った体勢となつた。久しぶりに新の体温を感じてリンの目からは次から次に涙がこぼれてくる。

「新。」

新の息が上がっているのが熱と肩の上下具合で伝わってくる。「私、福岡に戻るよ。新の居ないとここで、一人で頑張つてみる。」

「そうか。」

新はすんなりとリンの言つことを聞き入れた。東京に戻ろうとしていた決意と同じだと、すぐに理解できたからだ。

「遠距離だな。」

「今のお達なら、大丈夫なんじゃない？」

そんな気がした。今離れ離れになつても、きっとお互いへの気持ちが薄らぐことなくやつていけると思った。それがたとえまだ幼い証拠、と言われても。

リンは少し自分の体を離し、新と顔を向き合わせた。そしてどちらからともなくフツと微笑み、キスをした。

「リン約束して。」

唇が離れるとすぐに新が口を開いた。

「何？」

「嘘はもつづくな。」

リンは新の目を見て深く頷き、もう一度抱きしめた。しばらく会えなくなるお互いの体温を自分の体の中に刻むかのように、長い時

間抱きしめ合っていた。

病室の中はいつの間にか夕日色に染まり、一人の一つになつた長い影を作っていた。

「「めんね、急に呼び出して。」

終了式の次の日、リンは完司を呼び出した。完司は浦田さんはからいで少し長めに昼休みを貰えた為、以前に肉まんを食べた公園で待ち合わせをした。

「いや、気にすんな。新とは話できたか？」

「うん。昨日ちゃんと話をしてきた。」

「そつか。」

完司はリンの表情を見て、お互に納得がいくように話せたのだと理解できた。それと同時に、完司の入り込む隙間はもう全然ないのだと感じた。

「いつ福岡に帰るんだ？」

「今日。最終の便で帰るよ。ZEXのみんなにも会いたかったけど、それはちょっと無理そろかな。」

「そつか。」

「でも、完司君にはどうしても直接お礼言いたくて。背中を押してくれてありがと。」

リンが新から別れようと言われた日、駅の近くで完司がリンを抱き寄せて「頑張れ。」と言つて胸を貸した日のことを一人共思い出した。

「話を聞いてくれてありがと。」

「どういたしまして。」

「支えてくれてありがと。」

「もういいって。何回礼を言つんだよ。」

完司が笑いながらリンのお礼を止めた。

「不思議だよね。事故に遭つた直後は絶望の中に居たのに、ひょんなことからこの場所に居るなんてや。」

リンが体の向きを変えて、公園を見渡した。

「事故に遭わなかつたら、佳澄と彩女に無理やり合コンに連れて行かれなかつたら、『ウと出会わなかつたら、図書館を知らなかつたら、』の場所にひやつて完司君と居ることがなかつたんだよね。」

「リン。」

「色々な偶然が重なつて今の自分が居るんだよね。」

昨日と違つて風のない公園に、暖かい日差しが降り注いでいる。

「リン。」

「ん？」

完司の呼ぶ声に反応つてもリンの視線は公園に向いている。

「リンが俺を知るのは、必然だつたよ。」

「え？」

「俺、歌手だから。」

完司のその言葉には、絶対に有名になるといつ意思が込められていた。

「そうだね。」

リンが馬鹿にすることなく、優しく微笑んだ。

「福岡に帰つても、応援してゐるから。」

「遠いな。」

「そうだね。簡単には来れないね。」

「辛くなつたら、いつでも連絡しろよ。」

「うん。あ、でも完司君に彼女ができるつとじづらにな。以前に完司に彼女がいないと聞いていたので、出た言葉だつた。

「リン。」

「ん？」

今の完司はリンのことしか見ていないのに。そのリンから『彼女ができたら』なんて自分は眼中に全く入つていないと感じると切なくなつて、完司は後ろからリンを抱きしめた。

「完司・・君?」

以前に駅の近くで胸を貸してもらつた時とは明らかに違つ感覺にリンは戸惑つた。

「リン。頑張れよ、本当に。」

抱きしめる腕の強さで、リンは完司の気持ちをよつやく理解した。

• • • •

いや、本当はとっくに気付いていたかもしれない。何がある度に助けてくれた完司の暖かさには、友達以上の気持ちが滲み出ていた。きっとそれに気付かないフリをしていたのだ。完司の気持ちには答えられないから。

完司君

風邪ひくなよ

た
h
」

「八」

「國、國也。」

完同な用の翻訳

完司は昔の番組を紹介するテレビで聞いたことのあるようなフレーズを、リンの言葉を遮つて並べて言った。抱きしめる腕の強さから、完司の気持ちがヒシヒシと伝わってくる。

「ノルマ」

かく。

完司の声が少し涙混じりになってきて、それにつられてリンも泣

それついでに、本当に最近は泣き虫だ。

「リンも、頑張れよ。」

完司が更に強くリンを抱きしめた。

「リン。俺が腕を離したら、俺の顔を見ずに行つて。」

「絶対、見るな。」

「わ、わかった。」

「離すぞ。」

そう言つて、完司の腕がリンから離れた。リンは足が地面とくつついているかのように、その場から動くことができない。

「行けよ。」

完司が少し、ぶつきらいほひに言つた。涙が流れるのを、必死で押さえている声だ。

「行け、早く。」

リンも泣くのを必死に押さえ、やっと歩き始めた。完司の言つ通り、振り返らずにただ前へと。

一步踏み出す度に、完司と過ごした時間がよみがえつてくれる。

図書館の入り口で初めて会つた時。

駅まで送つてくれた日々。

お笑いライブに行つた日々。

NEEXのライブをみた日々。

泣かせてくれた時。

励ましてくれた日々。

その他のこと、全部。

何回お礼を言つても足りない感謝の気持ちが、こらえきれなくなつた涙と共に溢れた。

「完司君…」

リンは振り向くことなく完司の名前を呼んだ。ちやんと聞こえるよに、大きな声で。

「ありがとう。本当に、ありがとう…」

肩を震わせて一生懸命お礼を言つてくるコンの背中を見ると、完司は更に泣きそうになつた。

「だから何回言つんだよ。」

完司が少し笑いながら言つて、リンもフフッと軽く笑つた。

「俺の方こそありがとうございました。リンと出合えて、良かった。」

「私も。」

「早く、行け。」

「うん。」

もう一度完司に促され、リンはまた歩き出した。振り返ることなく立ち止まることなくただ前をしっかりと見据えて。完司は最後となるそのリンの背中を見えなくなるまでじっと見ていた。公園からリンが居なくなつた後も、しばらくリンの歩いて行った方から視線を動かすことが出来なかつた。

「だから俺は、中坊かつての。」

ようやく動いた完司はまたいつの日かのように自分にツツ「んで空を見上げた。青く澄んだ空に、白い雲が少し浮かんでいた。

「もうそろそろ、行かなきや。」

空港のアナウンスを聞き終えた後、そう言ってリンは椅子から立ち上がった。

「もうか。」

「早いな。」

空港でリンと一緒に晩御飯を食べた佳澄と彩女も同時に椅子から立ち上がった。

「休みの日とか、来いよ。」

「息抜きも大事だからな。」

「うん。一人も、福岡の方に遊びに来てね。」

荷物はほとんど宅急便で送ったため、最低限の少ない荷物しか持つていらないリンはちょっとそこら辺に出掛ける様にしか見えない。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

最後に何を言えばいいのかわからず、三人が無言になる。

「寂しい。」

その沈黙を最初に破った彩女が泣き始めた。

「泣かないって約束したじゃん、もう。」

彩女の涙を見て佳澄も泣き始めた。

「タカスン、私ら一生のダチだからな。」

「うん。」

そんな一人の涙を見てリンの目にも涙が浮かんでくる。東京で、一生分の涙を流した気がする。

「じゃあ、またね。」

リンは一人を見てゆっくりと笑顔で言った。その表情からは一人と出会った時のような絶望感は全く感じられない。

「うん、また。」

「またねえつ。」

冷静な佳澄と相変わらず激しく泣いている彩女に最後の挨拶をした後、リンは背中を向けて荷物検査室の方へとゆっくり向かい始めた。佳澄と彩女はその場から動かず、どんどん小さくなつていクリンの背中をずっと眺めている。

「急げ！」

「こつちか？」

「居た！」

「おーい、リン！』

リンが荷物検査の順番を待つ列に辿り着いた頃、聞き覚えのある声が慌ただしく聞こえてきた。その声に反応して振り返ると、見覚えのある人達が視界に入った。

「みんな・・・！」

「バイト早めに終わらせてもらつたんだ！」

「大変な時に抜けてきたから睨まれちゃつたよ。」

「雷、ユキ。」

「何の挨拶も無しに帰るなんて、冷たいヤツだな。」

「コウ。」

「俺のメールの返事はいつも遅いのに、今日リンが福岡に帰るつて言つたら速攻でみんな集まつたんだぜ。」

「完司君。」

完司とは蜃頃ちゃんと挨拶しただけに、何だか少し照れくさい。

「みんな、ありがと。」

オレンジ色に空色に桜色に茶色の頭の四人組は空港内でどう考えても目立つていて、佳澄と彩女もそんな四人組に気づき、近付いてきた。

「目立つー。」

「パネエー！』

リンの大事な六人が横に並んだ。

「またうどん食いに来いよ。」

「変な人に付いていくなよ。」

「髪の相談はまかせや。」

「頑張れよ。」

「うわあ、完司普通。」

雷 ユキ ユウ 完司の順で一通りメッセージを貢うと、雷が笑いながら完司を指摘した。皆もつられて笑い出す。

「いいじゃん、別に。」

完司がちょっと拗ね気味に言つ。

「みんな、またね！」

リンは大事な六人を誰一人見逃すことなく本当に最後の眺めて挨拶をし、荷物検査室の中へと消えていった。昼頃完司と別れた時同様、一度も振り返ることなく。

「よし、今から完司の失恋パーティーな！」

「はつ！？」

リンの姿がすっかり見えなくなると、ユウが最初に口を開いた。それに続いて完司は思つてもいらない言葉に素つ頓狂な声を挙げた

「ばればれですよ。」

佳澄の言葉に彩女もうんうん、と頷く。

「まず晩御飯はうどんな！」

雷がちやつかりバイト先の宣伝をする。

「あー、もう！…」

完司が真つ赤な顔をして吠えた。

「ほら、行くぞ。」

そんな完司を無視するかのように、ユキが先導してスタッタと歩き出した。

「主役は俺だろつ！」

完全に開き直つた完司がユキを追い越し先頭に立つた。その完司を雷が追い越すと、完司がまた先頭に立とうと走り出し雷と完司の先頭争いが始まった。

「何やつてんだ。」

「まだ子どもだな。」

「でもちよつと可愛いかも。」

「コウとユキが大人な発言をすると、佳澄がポツリと言つた。

「えつ？どつち？」

佳澄の言葉に彩女が食いつく。

「知らない！」

「え？待て！」

佳澄は彩女の問をはぐらかすと少し照れながら完司達の方へと走り出し、彩女もその後を追い始めた。

「一人まで。」

「若いからな、女子高生。」

ユキの親父くさい発言に、コウとユキの一人は顔を合わせてクスリと笑うと皆の後を追いかけて走り始めた。

空港の外に出てからも走りを止める者はおらず、すっかり暗くなつた夜空に皆の足音と笑い声がいつまでも響いていた。

『リンちゃん、もう飛行機かしらね。』

「そうだな。』

ナースに車椅子で携帯電話の使用可能場所に連れてきたもつた新が亜貴に簡単に返事をした。携帯電話は顎あごと肩の間に挟んで、からううじて一人の力で話せている。

『寂しくない？』

「そりや、少しあはね。でも大丈夫だよ。』

確かに気持ちが、俺達の間にはあるから。

大きな窓から見える夜の街を見渡すと、遠くの空に飛んでいる飛行機を発見した。リンが乗っているのは、あの飛行機だろ？か。

「姉貴にも、まだまだ迷惑かけるよ。』

『ふふ、覚悟してるわ。』

もつとりハビリを頑張つて、飛行機に乗つてリンに会いに行こう。

それが今的新の目標である。

亜貴との電話を終え飛行機の進路をしばらく眺めた後、新は再びナースに車椅子を押してもらい自分の病室へと戻つていった。

戦いはまだ始まつたばかりだ。そう思いながら。

希望していた窓際の席をゲットできたリンは、座席から真っ暗な夜の雲の上をじっと眺めていた。新と東京に来た時、明るい雲の上の風景を一緒に眺めたことを必然的に思い出す。

「明日から仕事かあー。」

「あつとこう間に三日過ぎたな。」

後ろの席から旅の終わりを嘆く恋人と思われる男女二人の会話がリンの耳に入つてきた。あの日事故に遭わなければ、リンも新とこのような会話をしながら福岡へと帰つていた筈だった。

（本当、人生何があるかわからないよなあ。）

後ろ二人の三日間を振り返る楽しそうな話を聞きながらリンはそう思つた。

でも、事故に遭つたことで学べたことがたくさんある。だから決して無駄なことではなかつた。

（福岡に着くまで、一眠りするかな。）

昨日夜遅くまで帰りの準備をしていた為、落ち着いてくると睡魔が一気に襲つてきた。それと格闘することもなく、リンは静かに目を閉じた。

ねえ新。

新が以前のように後遺症のない体に戻ることは奇跡なのかな。

でも、私その奇跡を信じてみようと思つ。

神様は信じないけど、何か一つくらい信じるものがあつてもいいよね。

その壇の上で語られた、新の精神のよひし。

「恋愛読物が好きになりました。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2696d/>

雪の上の約束

2010年10月8日15時49分発行